

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

白幡前遺跡	e地点
川崎山遺跡	t地点
向山遺跡	i地点
殿内遺跡	d地点
真木野前遺跡	a地点
真木野遺跡	b地点
真木野遺跡	c地点
北裏畑遺跡	f地点
北裏畑遺跡	g地点
神野遺跡	a地点
新東原遺跡	m地点
上谷津台南遺跡	i地点
麦丸宮前上遺跡	d地点
井戸向遺跡	c地点
高津館跡	e地点
高津館跡	f地点
高津新田野馬堀遺跡	ℓ地点
高津梅屋敷遺跡	d地点
大和田新田芝山遺跡	f地点
逆水遺跡	h地点
池の台遺跡	h地点
島田込の内遺跡	c地点

平成27年度

八千代市教育委員会

例 言

1 本書は、八千代市教育委員会が平成26年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。報告書作成作業は、平成27年度事業として行った。

2 本書に収録した遺跡は、以下のとおりである。

No	遺跡No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡) 掘削/対象	調査原因	担当者
1	185	白幡前遺跡 e 地点	萱田字牛吹1786,1787 萱田町字舟着328-1	H26.5.2 ～5.14	上層 148/1,629.46	福祉施設建設	轟
2	241	川崎山遺跡 t 地点	萱田字中台2263-2外 萱田町字池ノ谷津690-1 の一部	H26.5.19 ～5.26	上層 44/499.35 下層 12/499.35	集合住宅建設	轟
3	173	向山遺跡 i 地点	大和田新田字向山501-14外	H26.6.19 ～7.4	上層 364/5,250	駐車場建設	轟
4	203	殿内遺跡 d 地点	村上字殿ノ内1583-1	H26.7.4 ～7.10	上層 48/456	貸倉庫建設	轟
5	266	真木野前遺跡 a 地点	真木野字前277-2の一部	H26.7.22	上層 16/287.13	個人住宅建設	轟
6	10	真木野遺跡 b 地点	大字町1-236-3	H26.11.4 ～11.14	上層 270/2,748.54	太陽光発電 設備建設	宮澤
7		真木野遺跡 c 地点	真木野字台235-1, 2	H27.3.16 ～3.23	上層 232/2,693	太陽光発電 設備建設	宮澤
8	242	北裏畑遺跡 f 地点	萱田町字萱田道823-4, -11	H26.8.11 ～8.14	上層 215/284.26	住宅建設	宮澤
9		北裏畑遺跡 g 地点	萱田町字北裏841-1	H27.3.9 ～3.12	上層 16/189.95	個人住宅建設	宮下
10	69	神野遺跡 a 地点	神野字築地949-2の一部	H26.8.29 ～9.5	上層 168/1,613	店舗建設	宮澤
11	259	新東原遺跡 m 地点	勝田字新東原1260-5の一部	H26.9.12 ～9.22	上層 112/1,062	個人住宅建設	宮澤
12	229	上谷津台南遺跡 i 地点	上高野字上谷津台1112-2	H26.9.29 ～10.9	上層 224/2,308	宅地造成	宮澤
13	153	麦丸宮前上遺跡 d 地点	大和田新田字米本道南 631-18,22,23,24	H26.11.17 ～11.20	上層 32/331.01	宅地造成	轟
14	284	井戸内遺跡 c 地点	萱田字木戸浦1161-3	H26.12.2 ～12.4	上層 32/360	住宅建設	轟
15	238	高津館跡 e 地点	高津字部田1329-1	H27.1.13 ～1.19	上層 28.5/299.05	住宅建設	宮下
16		高津館跡 f 地点	高津字中村552-1の一部	H27.2.9 ～2.13	上層 50/478.91	集合住宅建設	宮下
17	251	高津新田野馬堀遺跡 l 地点	八千代台西9丁目449	H27.1.20 ～1.26	上層 144/1,382	宅地造成	宮澤
18	166	高津梅屋敷遺跡 d 地点	大和田新田101-92	H27.1.28 ～2.2	上層 52/509	宅地造成	宮澤
19	159	大和田新田芝山遺跡 f 地点	大和田新田字長兵衛野 769-1-2外	H27.2.3 ～2.9	上層 36/320	駐車場・ 物置建設	宮下
20	100	逆水遺跡 h 地点	米本字逆水1229,1230-1 の各一部	H27.2.13 ～2.19	上層 25/258.91	個人住宅建設	宮澤
21	240	池の台遺跡 h 地点	萱田町660-3の一部	H27.3.3 ～3.6	上層 16/188	店舗建設	宮澤
22	48	島田込の内遺跡 c 地点	島田字込之内995-5	H27.3.17 ～3.20	上層 21/264.96	個人住宅建設	宮下

- 3 平成26年度の教育委員会の調査体制は以下のとおりである。

調査主体者	加賀谷 孝	八千代市教育委員会 教育長
	小林 伸夫	八千代市教育委員会 教育次長
事務担当	秋山 利光	八千代市教育委員会教育総務課 主幹 (文化財担当)
	常松 成人	八千代市教育委員会教育総務課文化財班 副主幹
	佐藤 麻里子	八千代市教育委員会教育総務課文化財班 主査
調査担当	宮澤 久史	八千代市教育委員会教育総務課文化財班 副主幹
	宮下 聡史	八千代市教育委員会教育総務課文化財班 文化財主事
	轟 直行	八千代市教育委員会教育総務課文化財班 文化財主事

- 4 整理作業は資料の収集・整理を宇都洋子、半澤秀子、出上土器の拓本・断面実測を宇都、半澤、岩崎千代子、杵島由希が行い、その他の遺物の実測・トレース、遺物の写真、本文の執筆・編集は秋山が行った。

- 5 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院 「佐倉」1/50,000 (平成10年発行)

各遺跡の調査地点位置図 八千代市 「八千代都市計画基本図」1/2,500 (平成22年撮影・平成24年修正)のデータを100%又は50%縮小し、必要に応じて加筆修正して用いている。また、図面は正位置のまま利用しており、常に真上が座標北となるため、方位の記載は省略した。

- 6 本書の実測図における用例は、以下のとおりである。

- (1)図面の縮尺は、以下を基本とし、その他必要に応じて縮尺を変更した。

調査地点位置図 1/2,500～5,000 トレンチ配置図 1/400～1,000 土層断面図 1/80

- (2)図中における標高は、本市「都市計画基本図」中に標高が記された地点付近を基準に測定した場合や、街区三角点等を基準にした場合で精度が相違するため、その基準点の精度に応じた有効桁で表記した。

- (3)図に用いた網掛け等は、その図中に凡例を示した。

- 8 本書の遺物実測図における用例は、以下のとおりである。

- (1)図面の縮尺は基本的には以下のとおりとした。

完形土器実測図 1/4 土器拓影図・土製品実測図 1/3 石器・石製品実測図 1/2～1/4

- (2)図中の網掛けは以下のとおりとした。



- 9 表又は本文中の [] は残存値、() は推定復元値を表している。

また、本文第1表から第17表中の「報告書」の欄における「市内H○」の記載は、本市「市内遺跡調査報告書平成○年度」掲載を意味する。

- 10 本報告の発掘調査に伴う出土品及び図面、写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管する。

目次

例言・目次・挿図目次・表目次・図版目次

I 調査に至る経緯	1
II 各調査の概要	9
1. 白幡前遺跡 e 地点	9
2. 川崎山遺跡 t 地点	13
3. 向山遺跡 i 地点	16
4. 殿内遺跡 d 地点	19
5. 真木野前遺跡 a 地点	23
6. 真木野遺跡 b 地点	26
7. 真木野遺跡 c 地点	29
8. 北裏畑遺跡 f 地点	33
9. 北裏畑遺跡 g 地点	35
10. 神野遺跡 a 地点	37
11. 新東原遺跡 m 地点	40
12. 上谷津台南遺跡 i 地点	43
13. 菱丸宮前上遺跡 d 地点	46
14. 井戸向遺跡 c 地点	48
15. 高津館跡 e 地点	51
16. 高津館跡 f 地点	54
17. 高津新田野馬堀遺跡 l 地点	56
18. 高津梅原敷遺跡 d 地点	60
19. 大和田新田芝山遺跡 f 地点	62
20. 逆水遺跡 h 地点	65
21. 池の台遺跡 h 地点	68
22. 島田込の内遺跡 c 地点	70

報告書抄録……………巻末

挿図目次

第1図 平成26年度市内遺跡調査地点位置図	8
第2図 白幡前遺跡 e 地点位置図	9
第3図 e 地点トレンチ配置図・土層断面図	10
第4図 白幡前遺跡 e 地点出土遺物	11
第5図 川崎山遺跡 t 地点位置図	13
第6図 t 地点トレンチ配置図・土層断面図	14
第7図 川崎山遺跡 t 地点出土遺物	15
第8図 向山遺跡 i 地点位置図	16
第9図 i 地点トレンチ配置図・土層断面図	17
第10図 向山遺跡 i 地点出土遺物	17
第11図 殿内遺跡 d 地点位置図	20
第12図 d 地点トレンチ配置図・土層断面図	20
第13図 殿内遺跡 d 地点出土遺物	20
第14図 真木野前遺跡 a 地点, 真木野遺跡 b 地点, c 地点位置図	23
第15図 真木野前遺跡 a 地点トレンチ配置図・ 土層断面図・出土遺物	24
第16図 真木野遺跡 b 地点 トレンチ配置図・土層断面図	26
第17図 真木野遺跡 b 地点出土遺物	26
第18図 真木野遺跡 c 地点 トレンチ配置図・土層断面図	29
第19図 真木野遺跡 c 地点出土遺物	30
第20図 真木野遺跡 a, b, c 地点調査区域及び 遺構検出状況図	31
第21図 北裏畑遺跡 f 地点, g 地点位置図	33
第22図 f 地点トレンチ配置図・土層断面図 ・出土遺物	35
第23図 g 地点トレンチ配置図・土層断面図	36
第24図 神野遺跡 a 地点位置図	37
第25図 a 地点トレンチ配置図・土層断面図 ・出土遺物	38
第26図 新東原遺跡 m 地点位置図	40
第27図 m 地点トレンチ配置図・土層断面図 ・出土遺物	41

第28図	上谷津台南遺跡 i 地点位置図	43	第39図	高津梅屋敷遺跡 d 地点位置図	60
第29図	i 地点トレンチ配置図・土層断面図 ・出土遺物	45	第40図	d 地点トレンチ配置図・土層断面図 ・出土遺物	61
第30図	麦丸宮前上遺跡 d 地点位置図	46	第41図	大和田新田芝山遺跡 f 地点位置図	62
第31図	d 地点トレンチ配置図・土層断面図	47	第42図	f 地点トレンチ配置図・土層断面図	64
第32図	井戸向遺跡 c 地点位置図	49	第43図	逆水遺跡 h 地点位置図	65
第33図	c 地点トレンチ配置図・土層断面図	50	第44図	h 地点トレンチ配置図・土層断面図	66
第34図	高津館跡 e 地点, f 地点位置図	51	第45図	池の台遺跡 h 地点位置図	68
第35図	e 地点トレンチ配置図・土層断面図	52	第46図	h 地点トレンチ配置図・土層断面図	69
第36図	f 地点トレンチ配置図・土層断面図	54	第47図	島田込の内遺跡 c 地点位置図	71
第37図	高津新田野馬堀遺跡 ℓ 地点位置図	56	第48図	c 地点トレンチ配置図・土層断面図	72
第38図	ℓ 地点トレンチ配置図・土層断面図	58	第49図	島田込の内遺跡 c 地点出土遺物	72

表 目 次

第1表	白幡前遺跡の調査	10	第10表	井戸向遺跡の調査	49
第2表	川崎山遺跡の調査	14	第11表	高津館跡の調査	51
第3表	向山遺跡の調査	17	第12表	高津新田野馬堀遺跡の調査	56
第4表	殿内遺跡の調査	19	第13表	高津梅屋敷遺跡の調査	60
第5表	真木野遺跡の調査	26	第14表	大和田新田芝山遺跡の調査	63
第6表	北裏畑遺跡の調査	33	第15表	逆水遺跡の調査	66
第7表	新東原遺跡の調査	40	第16表	池の台遺跡の調査	68
第8表	上谷津台南遺跡の調査	44	第17表	島田込の内遺跡の調査	71
第9表	麦丸宮前上遺跡の調査	46			

図版目次

図版1	白幡前遺跡 e 地点	12	図版12	上谷津台南遺跡 i 地点	45
図版2	川崎山遺跡 t 地点	15	図版13	麦丸宮前上遺跡 d 地点	47
図版3	向山遺跡 i 地点	18	図版14	井戸向遺跡 c 地点	50
図版4	殿内遺跡 d 地点	22	図版15	高津館跡 e 地点	53
図版5	真木野前遺跡 a 地点	25	図版16	高津館跡 f 地点	55
図版6	真木野遺跡 b 地点	28	図版17	高津新田野馬堀遺跡 ℓ 地点	59
図版7	真木野遺跡 c 地点	32	図版18	高津梅屋敷遺跡 d 地点	61
図版8	北裏畑遺跡 f 地点	34	図版19	大和田新田芝山遺跡 f 地点	64
図版9	北裏畑遺跡 g 地点	36	図版20	逆水遺跡 h 地点	67
図版10	神野遺跡 a 地点	39	図版21	池の台遺跡 h 地点	70
図版11	新東原遺跡 m 地点	42	図版22	島田込の内遺跡 c 地点	73

I 調査に至る経緯

八千代市は郡心から東へ約30km、千葉市の中心部から北へ約13km離れた千葉県の北西部に位置する。房総半島内陸部にある市域の地形は、印旛沼西岸に広がる平坦な下総台地とそれを樹枝状に開析する谷津や河川で構成される。

市域の中央を南北に貫く新川（印旛放水路）は、上流域では勝田川、下流域では平戸川と呼ばれていた。本来、新川は印旛沼水系に属しており、千葉市の長沼一帯を水源とし南から北に流下し、その左岸から、高津川（八千代1号幹線）・桑納川・神崎川が合流し、平戸で流れを東に変え、印旛沼に流れ込んでいた。

これらの河川は、市域の台地を大きく大和田・陸・阿蘇の3つに区分している。

本市における埋蔵文化財の保護は、文化財保護法の規定に基づき、千葉県教育委員会と連携して行ってきた。とりわけ、市域で行われる開発事業については「八千代市開発事業における事前協議の手続等に関する条例」および同条例施行規則に基づき、「八千代市開発事業」における事前協議として、八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）が「埋蔵文化財の取り扱いについて（確認）」（以下「確認依頼」という。）の書面を受け、開発予定地が埋蔵文化財包蔵地であり、確認調査が必要と判断された場合、事業者等の協力を得て、国庫及び県費の補助金を受けた「市内遺跡発掘調査事業」を実施し、その保護に努めてきた。

以下は、平成26年度に実施した「市内遺跡発掘調査事業」の各調査に至る経緯である。

1. 白幡前遺跡 e 地点

平成25年10月22日、玉井正博氏から八千代市萱田字牛喰1786番、1787番及び萱田町字舟着328番1 面積1,629.46㎡に福祉施設を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は宅地と荒蕪地であったが、周辺の畑地で土師器の散布が確認され、近隣の調査でも遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項の規定による土木工事のための発掘届（以下「法第93条の届出」という。）及び、その取扱いについての協議（以下「協議」という。）が必要である旨、同年10月28日付けで回答した。その後、開発事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年11月12日付けで、同氏から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った平成26年5月2日に調査を開始した。

2. 川崎山遺跡 t 地点

平成26年3月7日、渡邊邦雄氏から八千代市萱田字中台2263-2の一部、同-3の一部、及び萱田町字池の谷津690-1の一部 面積499.35㎡に集合住宅の建設を目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は荒蕪地であったが、周辺の畑地で縄文土器の散布が確認されており、近隣の調査でも遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は、確認依頼地全域について、法第93条の届出及び協議が必要である旨、同年3月12日付けで回答した。その後、開発事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年3月20日付けで、同氏から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った同年5月19日に調査を開始した。

3. 向山遺跡 i 地点

平成26年6月4日、学校法人 東京女子医科大学八千代医療センター から八千代市大和田新田字向山501-14、501-15及び-16の一部、501-17 面積5,250㎡に駐車場を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は荒蕪地であったが、近隣の調査でも遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年6月12日付けで回答した。その後、開発事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

法第93条の届出は同年6月11日付けで、同法人から提出されていた。

市教委は準備の整った同年6月19日に調査を開始した。

4. 殿内遺跡 d 地点

平成26年6月24日、三協フロンティア株式会社 から八千代市村上字殿ノ内1583-1 面積456㎡に貸倉庫を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況が畑地で、当該地において土器の散布が確認された。さらに近隣の調査でも遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年6月27日付けで回答した。その後、開発事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

法第93条の届出は同年6月25日付けで、同社から提出されており、市教委は準備の整った同年7月4日に調査を開始した。

5. 真木野前遺跡 a 地点

平成26年6月10日、戸田雅明氏から八千代市真木野字前277-2の一部 面積287.13㎡に個人住宅を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は宅地であり、近隣の調査でも遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年6月19日付けで回答した。その後、同氏との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

法第93条の届出は同年6月10日付けで、同氏から提出されていた。

市教委は準備の整った同年7月22日に調査を開始した。

6. 真木野遺跡 b 地点

平成26年10月10日、花澤五十鈴氏から八千代市大学町1-236-3 面積1,800㎡に太陽光発電設備を設置す

ることを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は山林であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、かつて同所の一部に確認調査が行われており、遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年10月16日付けて回答した。その後、同氏との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年10月21日付けで、同氏から面積を2,748.54㎡に変更し、法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った同年11月4日に調査を開始した。

7. 真木野遺跡 c 地点

平成27年1月9日、有限会社 夏見住宅 から八千代市真木野字台235-1, 235-2 面積2,693㎡に太陽光発電設備を設置することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は山林であったが、隣接する区域の調査で遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年1月14日付けて回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

法第93条の届出は同年1月9日付けで、同社から提出されていた。

市教委は準備の整った同年3月16日に調査を開始した。

8. 北裏畑遺跡 f 地点

平成26年6月16日、タクトホーム株式会社 から八千代市萱田町字萱田道823-4, 823-11 面積284.26㎡に戸建て住宅を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は宅地であり、当該地周辺において土器の散布が確認されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年6月20日付けて回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年8月5日付けで、同社から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った同年8月11日に調査を開始した。

9. 北裏畑遺跡 g 地点

平成27年2月16日、広島建設株式会社 から八千代市萱田町字北裏841-1 面積189.95㎡に戸建て住宅を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は宅地であったが、当該地周辺において土器の散布が確認されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年2月23日付けて回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年3月4日付けで、当該戸建て住宅の建て主である佐々木規之氏から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備が整った同年3月9日に調査を開始した。

10. 神野遺跡a地点

平成26年6月24日、株式会社 山岡設計事務所 から八千代市神野字築地949番2の一部 面積1,613㎡に店舗を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は工場跡地で、すでに荒蕪地となっていた。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、神野貝塚、神野芝山古墳群、神野新山塚群などの遺跡に囲まれていた。市教委は当該確認地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年6月30日付けで回答した。その後、事業者等との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

法第93条の届出は同年6月24日付けで、事業主体者である株式会社 セブン-イレブン・ジャパンから、提出されていた。

市教委は準備の整った同年8月29日に調査を開始した。

11. 新東原遺跡m地点

平成26年8月27日、井手健二郎氏から八千代市勝田字新東原1260番の5 面積1,647.71㎡に戸建て住宅を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は山林であったが、周辺地区の調査で遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は当該確認地の一部1,062㎡について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年9月2日付けで回答した。その後、同氏との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年9月5日付けで、当該住宅の建て主である同氏から敷地の一部についてのみ建設工事を行うため、面積を1,168.27㎡に変更し、法第93条の届出が提出された。しかし、調査の対象となった区域が工事区域に含まれていたため、調査面積に変更は生じなかった。

市教委は準備の整った同年9月12日に調査を開始した。

12. 上谷津台南遺跡i地点

平成26年5月27日、酒井甲二氏から八千代市上高野字上谷津台1112番2 面積2,308㎡に宅地造成工事を目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は畑地であったが、周辺地区の調査で遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は当該確認地について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年5月29日付けで回答した。その後、事業者等との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年7月10日付けで、事業主体者 アイディホーム株式会社から、当初の確認地、面積2,308㎡について、法第93条の届出が提出された。その後、隣接区域との接道工事の関係で当初の区域に上高野字上谷津台1112番23を追加し、合計面積2,321.98㎡に開発区域を変更したため、同年8月4日付けで、同社から変更された区域で確認依頼が再度、提出された。追加された区域がすでに確認調査が行われた区域であったため、当初の回答と同様に2,308㎡について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年8月5日付けで回答したが、7月10日付けの届出及び前回の協議をもって必要な要件は満

たしていた。

市教委は準備の整った同年9月29日に調査を開始した。

13. 麦丸宮前上遺跡d地点

平成26年10月2日、東海住宅 株式会社 から八千代市大和田新田字米本道南631番18、22、23、24 面積331.01㎡に宅地造成工事をするを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は荒蕪地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であった。また、当該地周辺において確認調査及び本調査が行われ遺構・遺物が検出されていた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年10月6日付けで回答した。

その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。同年10月31日付けで、事業主体者である同社から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った同年11月17日に調査を開始した。

14. 井戸向遺跡c地点

平成26年10月10日、株式会社 ワイケイアート から八千代市菅田字木戸浦1161番3 面積360㎡に建売住宅を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、現況は畑地であったが、当該地周辺において確認調査及び本調査が行われ遺構・遺物が検出されていたため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年10月16日付けで回答した。その後、事業者との協議において事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年10月20日付けで、事業主体者である同社から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った同年12月2日に調査を開始した。

15. 高津館跡e地点

平成26年12月26日、株式会社 H R E から八千代市高津字部Ⅲ1329番1 面積299.05㎡に建売住宅を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は荒蕪地であり、また、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内で、城館跡の土塁や堀とみられる構造物も確認されていた。また、当該地周辺において確認調査が行われ、遺物の検出もみられていたため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、翌平成27年1月7日付けで回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

法第93条の届出は、平成26年12月26日付けで事業主体者である同社から提出されていた。

市教委は準備の整った翌平成27年1月13日に調査を開始した。

16. 高津館跡f地点

平成26年9月4日、中村吉見氏から八千代市高津字中村552番1の一部 面積478.91㎡に集合住宅を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は、住宅解体後に荒蕪地となっていた。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域に含まれていたため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年9月9日付けで回答した。その後、同氏との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。同年12月5日付けで、同氏から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った翌平成27年2月9日に調査を開始した。

17. 高津新田野馬堀遺跡 e 地点

平成26年12月25日、株式会社 サンプル から八千代市八千代台西9丁目449番 面積2,589.12㎡に宅地造成することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地は、千葉市との市境に位置し、現況は畑地であった。当該地の一部は、周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれていた。この周辺では、千葉市との市境において確認調査・本調査がたびたび行われており、野馬堀・野馬上手などの遺構や、近世近代の遺物の出土も多数みられた。そのため、市教委は確認依頼地の一部 面積1,382㎡について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、翌平成27年1月6日付けで回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

平成27年1月8日付けで、工事主体者である同社から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った同年1月20日に調査を開始した。

18. 高津梅屋敷遺跡 d 地点

平成27年1月8日、株式会社 アビリティハウス から八千代市大和田新田101番92 面積509㎡に宅地造成することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は駐車場となっていたが、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内で、周辺において確認調査が行われ遺物の検出もみられた。そのため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年1月14日付けで回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

法第93条の届出は、同年1月8日付けで工事主体者である同社から提出されていた。

市教委は準備の整った同年1月28日に調査を開始した。

19. 大和田新田芝山遺跡 f 地点

平成26年4月4日、学校法人 東邦大学 から八千代市大和田新田字長兵衛野769-1-2、768-10の各一部 面積1,489.91㎡に運動場整備のための関連施設の建設を目的とした確認依頼が市教委に提出された。

同確認地の現況は既存駐車場や畑地であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、近隣の確認調査で遺物の出土もみられた。そのため、市教委は確認地の西側の一部が過去に駐車場整備のために確認調査が行われた区域及び包蔵地から外れている東側の半分を除外し、残った開発区域の一部 面積320㎡について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年4月10日付けで回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査

を行うこととなった。

同年4月30日付けで、同法人から法第93条の届出が提出された。

確認地の一部が畑地であったため、農地法に基づく農地転用の手続き後、市教委は準備の整った翌平成27年2月3日に調査を開始した。

20. 逆水遺跡h地点

平成26年10月27日、関谷亮太氏から八千代市米本字逆水1229番、1230番1, 2, 5, 6の一部、1231番1, 2, 1232番の一部 面積2,232.47㎡に戸建て住宅の建て替えを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は既存の建物が複数建ち並ぶ牧場であった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内であり、また、周辺において確認調査が行われ、遺構・遺物の検出もみられたため、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年10月31日付けで回答した。その後、事業者との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

平成26年11月11日付けで、同氏及び関係者との共同名義で、区域を米本字逆水1229番、1230番1の各一部 面積258.91㎡に限定して、法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った翌平成27年2月13日に調査を開始した。

21. 池の台遺跡h地点

平成26年12月11日、吉野和茂氏から八千代市葦田町字戸660番3の一部 面積1,408㎡に店舗を建設することを目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は既存の宅地であり、一部が周知の埋蔵文化財包蔵地の区域に含まれていた。また、当該地周辺における調査で遺物の出土もみられていたため、市教委は確認地の一部 面積188㎡について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、翌平成27年1月5日付けで回答した。その後、同氏との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

平成27年1月21日付けで、同氏から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った平成27年3月3日に調査を開始した。

22. 島田込の内遺跡c地点

平成26年11月5日、山口好文氏から八千代市島田字込之内995番5 面積264.96㎡に戸建て住宅の建設を目的とした確認依頼が市教委に提出された。

確認地の現況は既存の宅地であり、周知の埋蔵文化財包蔵地の区域内に含まれていた。周辺において確認調査・本調査が行われており、多数の遺構・遺物の検出がみられていたため、当該地は濃厚な遺跡の一部であると判断し、市教委は確認依頼地全域について、法第93条に基づく届出及び、その取扱いについての協議が必要である旨、同年11月17日付けで回答した。その後、同氏との協議において、事業継続の意向が確認されたため、確認調査を行うこととなった。

同年12月12日付けで、同氏から法第93条の届出が提出された。

市教委は準備の整った翌平成27年3月17日に調査を開始した。



第1図 平成26年度市内遺跡調査地点位置図

- 1.白幡前遺跡 e地点 2.川崎山遺跡 t地点 3.向山遺跡 i地点 4.殿内遺跡 d地点 5.真木野前遺跡 a地点 6.真木野遺跡 b地点
 7.真木野遺跡 c地点 8.北真田遺跡 f地点 9.北真田遺跡 g地点 10.神野遺跡 e地点 11.新東原遺跡 m地点 12.上谷津台南遺跡 i地点
 13.芝丸宮前上遺跡 d地点 14.井戸向遺跡 c地点 15.高津前遺跡 e地点 16.高津遺跡 i地点 17.高津新田野馬廻遺跡 s地点
 18.高津橋屋敷遺跡 d地点 19.大和田新田芝山遺跡 f地点 20.逆水遺跡 h地点 21.池の台遺跡 h地点 22.鳥田込の内遺跡 c地点

Ⅱ 各調査の概要

1. 白幡前遺跡 e 地点

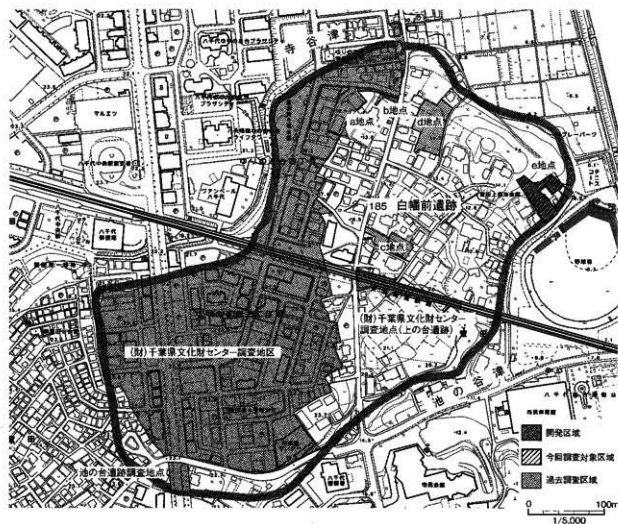
遺跡の立地と概要

白幡前遺跡は、市域の中央部、萱田地区に所在する。新川の中流域、左岸の台地上の標高24mから12mの河岸段丘上に立地する。遺跡の北側には「寺谷津」、南側には「池の谷津」が台地を閉折し、遺跡を区分している。遺跡の立地する河岸段丘は、下総下位面と千葉段丘面で形成されている。本跡の規模は、北東-南西方向で約650m、北西-南東方向で最大約370mである。

平成9年に埋蔵文化財包蔵地の整理統合が行われ、台地先端部の千葉段丘面の「上ノ台遺跡」が統合され、また、本跡南端、市道により区分されていた池の台遺跡 c 地点の一部が本跡に帰属すると考えられた。

本跡の調査は、昭和54年から始まる萱田地区の区画整理事業を原因として行われた財団法人 千葉県文化財センター（以下「(財)文化財センター」又は「文セ」とする。）が行った調査が最初となり、弥生時代から古墳時代にわたる集落から、奈良・平安時代の大規模な集落の検出など、多くの調査成果をあげている。以降6地点の確認調査及び本調査が行われている。

今回の調査区域 e 地点は、本跡の北東側の台地先端部に位置する。地形的には千葉段丘面の先端になる。

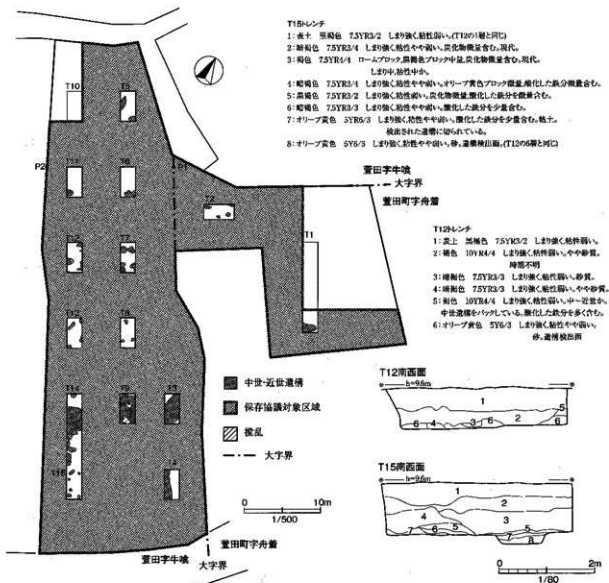


第2図 白幡前遺跡 e 地点位置図

第1表 白幡前遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	117.6-1,497.97	確認	平安時代 瓦穴遺物18、竪立柱礎物3、土坑・ピット3個、井戸状遺構2、中央 溝状遺構1	縄文土器 (中原加賀付6式) 弥生土器 (後項) 平安時代土師器 須恵系 陶器	市教委	H13.2	未報告
	1,497.97	本調査			調査会	H13.5	
b	214/214	確認	奈良・平安時代 土坑4溝2	奈良・平安時代 土師器、須恵系	山教委	H13.9	山内H14
c	91,994.01	確認	奈良・平安時代 瓦穴遺物4、土坑12溝1	奈良・平安時代 土師器、須恵系	市教委	H19.10	山内H20
	311	本調査	後近世土坑等	中・近世 陶器 瓦片等	山教委	H20.3	#1
d	236/2,306	確認	縄文時代 瓦穴遺物2、六項時代 瓦穴遺物2	縄文土器、石器	山教委	H25.9	山内H26
	90.15	本調査	奈良・平安時代 土坑11溝1	奈良・平安時代 土師器、須恵系、須恵系		H25.10	未報告
文セ調査地区	94,036	本調査	弥生時代後期 瓦穴遺物17、六項時代後期 須穴遺物5、奈良・平安時代 瓦穴遺物29、同時代 溝状柱礎物130個	土師器時代石器、弥生土器、古墳時代土師器	(財)千葉県文化財センター	S54.8-563.9	#2
文セ上の台	2,027	本調査	奈良・平安時代 瓦穴遺物14他	奈良・平安時代 土師器 須恵系	(財)文セ	H21.2-H23.7	#3
道の台	675	本調査	平安時代 瓦穴遺物2他	平安時代 土師器他	市教委	S85	#4

#1「白幡前遺跡」地点 #2「A」[A]区内白幡前遺跡-倉田山地区縄文文化調査報告書V」 #3「八十代市沖原遺跡-上の台遺跡」他
 #4「道の台遺跡-都心計画区画3-3-3-7号地区工事先行する緊急調査」



第3図 e地点トレンチ配置図・土層断面図

調査の方法と経過

発掘調査は、大字界上の杭(P1)に基点を置き、境界杭(P2)を結ぶラインを基線とした。この基線を基準にして、2m×4mのトレンチを規則的に設定した。掘削は遺構確認面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

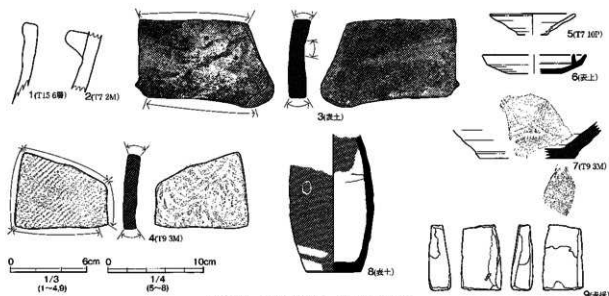
調査は平成26年5月2日から5月14日まで行った。2日金曜日、トレンチの設定。7日水曜日、重機によるトレンチの掘削を開始。翌8日、12日まで引き続き作業を継続した。9日金曜日、遺構検出面の清掃を開始し、遺構検出作業を行った。13日火曜日、土層の分層。土層の実測や写真撮影等記録作業を行う。14日水曜日、重機によりトレンチの埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査の概要

調査区は遺跡の北東端に位置し、新川と沖積地に面している。前面の沖積地は、現在、盛り土され市民野球場になっているが、元の水田面の標高は6m前後であったと思われる。水田面自体も、新川の河川改修が江戸時代から行われており、本来の姿はとどめていない。台地は沖積地側に標高9mから10m台の狭い平場があり、その背後の標高16mほどの小高い段丘面に向かって傾斜する。

調査区の土層は、場所により違いがあり、現地表面より80cmから1mほどで遺構確認面とした粘土層や砂層に達する。

発掘調査は調査対象面積1,629.46㎡に対して、トレンチ14か所、掘削面積148㎡、全体の9.08%の面積を調査した。調査の結果、奈良・平安時代土坑3基、中世土坑38基、近世土坑1基、同溝1条などが検出されている。出土遺物は中世から近世の陶磁器や土器が主体を占めており、表採遺物も含めて、84点を採取した。縄文土器や弥生土器は確認されず、土師器15点や須恵器10点が出土している。また、陶磁器は18点、素焼きの土器は25点あった。砥石、礫類6点、鉄片4点、その他不明なものなど6点であった。1は素焼きの土銅片。外面黒変。2は素焼きの内耳銅片。内・外面とも黒変。3は陶器片。断面の各所に擦痕がみられ、2次使用。内面の一部にも擦痕あり。4は須恵器片。断面の各所に擦痕。2次利用。5は素焼きの坏。6は灯明皿。7は陶器の楕円片。8は磁器の花瓶。9は砥石。

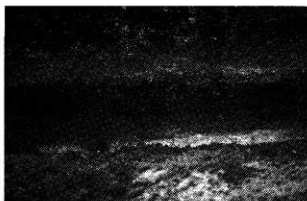


第4図 白幡前遺跡e地点出土遺物

図版1 白幡前遺跡e地点



1. 調査区域全景



2. T12トレンチ南北土層



3. T15トレンチ南北土層



4. T7トレンチ遺構確認状況



5. T12トレンチ遺構確認状況



6. T15トレンチ遺構確認状況



7. 出土遺物(1~7.9)



8. 出土遺物(8)

調査のまとめ

本跡が奈良・平安時代の大規模な集落として特徴付けられることは、過去7回の調査で明らかとなってきたが、今回の調査において、中世以降における本跡の別な性格の一端がみえてきた。しかし、多数の土坑と溝がどのような性格の遺構であるか、依然として明らかにすべきことが多い。

今回の確認調査によって、保存協議の対象となった区域は、調査対象区域の一部1,410.64㎡であった。その後、事業者との協議により、平成26年度中に本調査が実施され、報告書が刊行されている。

*「千葉県八代市 白幡前遺跡 e 地点—福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」平成27年3月

2. 川崎山遺跡 t 地点

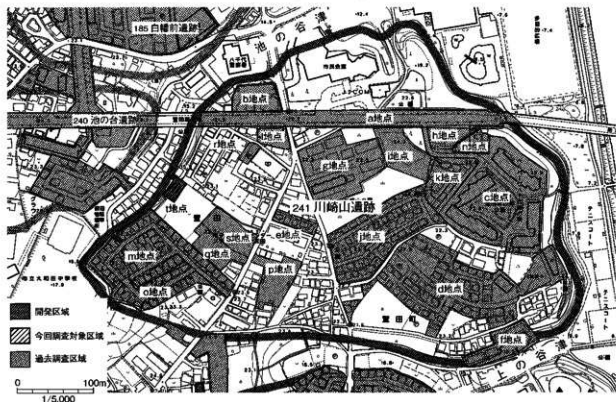
遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は、市域の南部、荻田町地区に所在する。新川の中流域、その左岸の台地上に立地する。遺跡の北側の「池の谷津」、南側の「上の谷津」が台地を開析し、遺跡を区分している。この台地は、河岸段丘の下縁下位面で形成され、標高23mから24mのほぼ平坦な地形をしている。

本跡の規模は、南北方向で約430m、東西方向で約650mである。

本跡の調査は、昭和54年の都市計画道路建設を原因として行われた調査を最初として、19回にわたって行われている。本跡の中心となる弥生時代から奈良・平安時代の集落は、新川に面する台地東側の先端部に検出されている。また、縄文時代の小規模な集落や陥穴群などは本跡全域に点在して検出されている。一方、古墳時代中期の石製模造品などが出土する工房跡の検出は特筆される。

今回の調査区域 t 地点は、本跡の西端、池の谷津からの急峻な段丘崖の縁に立地する。

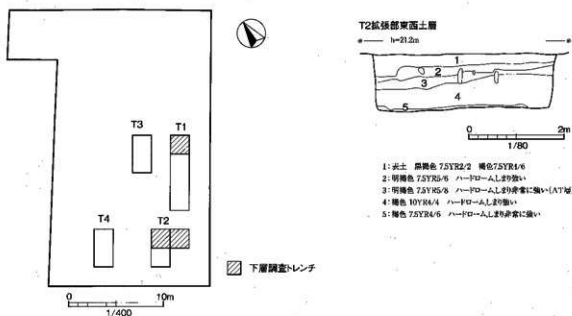


第5図 川崎山遺跡 t 地点位置図

第2表 川崎山遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	調査書
a	856,000	確認	弥生時代 竪穴建物 4 古墳時代 竪穴建物 3 上段土壌 2	弥生土器 古墳時代 土器器底石製品、F1土勾玉2、鹿玉1(土か)	調査会	S5.3 S5.5	無1
		本調査	縄文時代 土坑1	縄文土器 (早期-後期) 片断	市教委	H11.1	市内H1.3
b	140-1,330 1,720-15,614	確認	弥生時代 土坑1	縄文土器 (早期-後期) 片断	山教委	H5.9	市内H.5
		本調査	弥生時代 竪穴建物 1 古墳時代 竪穴建物 2 平安時代 竪穴建物 2(土か)	弥生土器 (前期-後期) 弥生土器 (後期) 古墳時代 中層-平安時代 土器器底石製品	調査会	H6.4	無2
c	1,210-9,100 763-5,280	確認	縄文時代 竪穴状土坑4 弥生時代 竪穴建物 5 古墳時代 中層-中期 竪穴建物 2 竪穴建物 2	縄文土器 (早期前期段階) 弥生土器 (前期) 古墳時代 土器器底石製品、片断、石製品 石製品	市教委	H9.1	市内H.9
		本調査	平安時代 竪穴建物 1(土か)	平安時代 土器器底石製品	調査会	H14.5	無3
d	96-920.19 209-1,550	確認	縄文時代 竪穴状土坑1	縄文土器 古墳時代 土器器	市教委	H9.9	市内H.9
		本調査	平安時代 竪穴建物 2	弥生土器、内墳時代 土器器 平安時代 土器器底石製品	市教委	H10.8	市内H10
e	209-1,550 82	確認	平安時代 竪穴建物 2	弥生土器、内墳時代 土器器 平安時代 土器器底石製品	調査会	H10.11	無4
		本調査	縄文時代 竪穴状土坑4	なし	市教委	H11.2	市内H11
f	750-7,215 60	確認	縄文時代 竪穴状土坑4	なし	市教委	H11.2	市内H11
		本調査	弥生時代 竪穴建物 3 古墳時代 中層 竪穴建物 2 (下層部)	弥生土器 (前期-中期) 弥生土器 (後期) 古墳時代 (中期) 土器器底石製品 (後期) 土器器	調査会	H11.5	無5
g	319-1,498.04 966	確認	弥生時代 竪穴建物 3 古墳時代 中層 竪穴建物 2 (下層部)	弥生土器 (前期-中期) 弥生土器 (後期) 古墳時代 (中期) 土器器底石製品 (後期) 土器器	調査会	H11.5	無5
		本調査	縄文時代 竪穴状土坑4	なし	市教委	H11.8	市内H12
h	450-2,983.31 873.5-9,483.86 33.00	確認	なし	なし	市教委	H11.8	市内H12
		本調査	縄文時代 竪穴状土坑3 近世以降 溝3	なし	市教委	H11.10	無6
i	330-2,339.50 170	確認	縄文時代 竪穴状土坑3 近世以降 溝3	なし	市教委	H11.10	無6
		本調査	弥生時代 竪穴建物 1 時期不明 土坑5他	弥生土器 (後期) 弥生土器、平安時代 土器器	調査会	H16.3	無7
j	105-1,051 793-9,791.91	確認	弥生時代 竪穴建物 1 時期不明 土坑5他	弥生土器 (後期) 弥生土器、平安時代 土器器	調査会	H16.3	無7
		本調査	古墳時代 竪穴建物 2 古墳時代 中層 竪穴建物 1、土坑3	弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期)	調査会	H16.4	無8
k	105-1,051 793-9,791.91	確認	弥生時代 竪穴建物 1 時期不明 土坑5他	弥生土器 (後期) 弥生土器、平安時代 土器器	調査会	H16.4	無8
		本調査	古墳時代 竪穴建物 2 古墳時代 中層 竪穴建物 1、土坑3	弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期)	調査会	H16.4	無8
l	105-1,051 793-9,791.91	確認	弥生時代 竪穴建物 1 時期不明 土坑5他	弥生土器 (後期) 弥生土器、平安時代 土器器	調査会	H16.4	無8
		本調査	古墳時代 竪穴建物 2 古墳時代 中層 竪穴建物 1、土坑3	弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期) 弥生土器 (前期)	調査会	H16.4	無8
m	126-1,178.78 303	確認	縄文時代 竪穴 弥生時代 竪穴建物 2 古墳時代 中層 竪穴建物 2(土か)	縄文土器、弥生土器 (後期) 弥生土器 弥生土器	山教委	H19.4 H19.5	市内H20 無9
		本調査	弥生時代 竪穴建物 1 古墳時代 中層 竪穴建物 2(土か)	弥生土器、弥生土器 (後期) 弥生土器 弥生土器	山教委	H19.4 H19.5	市内H20 無9
n	264-3,569 250-2,543.81	確認	なし	なし	市教委	H20.7	市内H21
		本調査	縄文時代 竪穴 弥生時代 竪穴建物 2 古墳時代 中層 竪穴建物 2(土か)	縄文土器 弥生土器 弥生土器	市教委	H20.7	市内H21
o	264-3,569 250-2,543.81	確認	なし	なし	市教委	H20.7	市内H21
		本調査	縄文時代 竪穴 弥生時代 竪穴建物 2 古墳時代 中層 竪穴建物 2(土か)	縄文土器 弥生土器 弥生土器	市教委	H20.7	市内H21
p	190-1,985.77 20-200	確認	縄文時代 竪穴 1(土か)	縄文土器 土器器	市教委	H24.3	市内H24
		本調査	古墳時代 中層 竪穴建物 1(土か)	古墳時代 土器器	市教委	H24.6	市内H25
q	190-1,985.77 20-200	確認	縄文時代 竪穴 1(土か)	縄文土器 土器器	市教委	H24.3	市内H24
		本調査	古墳時代 中層 竪穴建物 1(土か)	古墳時代 土器器	市教委	H24.6	市内H25
r	220-2,263.02	確認	近現代 溝1	縄文土器、古墳時代 土器器	市教委	H25.8	市内H26
		本調査	近現代 溝1	縄文土器、古墳時代 土器器	市教委	H25.8	市内H26

※1 「要約資料川崎山遺跡」 ※2 「川崎山遺跡」 ※3 「川崎山遺跡4地点」 ※4 「川崎山遺跡1地点」 ※5 「川崎山遺跡1地点」
 ※6 「公共事業調査報告書川崎山遺跡」 ※7 「川崎山遺跡1地点」 ※8 「川崎山遺跡1地点」 ※9 「川崎山遺跡1地点」
 ※10 「川崎山遺跡1地点」

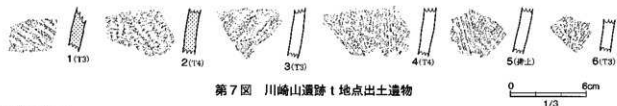


第6図 t地点トレンチ配置図・土層断面図

調査の方法と経過

発掘調査は調査区の形状に合わせて、任意に2m×4mを基本とするトレンチを設定した。掘削は重機の搬入が不可能であったため、遺構確認面であるローム上面まで人力により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高の基準は不明。調査は平成26年5月19日から5月26日まで行われた。19日月曜日、調査区の設定、人力でT1、T2の掘削を開始。20日火曜日、掘削継続。22日木曜日、T4の掘削終了。遺構確認されず。T1、T2下層調査開始。23日金曜日、下層調査終了、下層での出土遺物は確認できず。埋め戻しを開始。26日月曜日、埋め戻しが終了し、調査を完了した。



第7図 川崎山遺跡 t 地点出土遺物

調査の概要

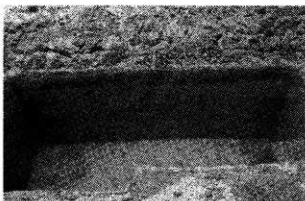
調査区の土層は、現地表面より20cmほどの耕作土を除去するとハードローム層が検出された。

発掘調査は、調査対象面積499.35㎡に対して、トレンチ4か所、掘削面積44㎡、全体の8.81%の面積を調査した。調査の結果、遺構は検出されていないが、遺物は総数26点出土した。縄文土器は14点、内前期(1,2,3)が5点、後期(4,5,6)ほか9点であった。土師器が8点、礫1点、その他不明なものも含め3点を回収した。

図版2 川崎山遺跡 t 地点



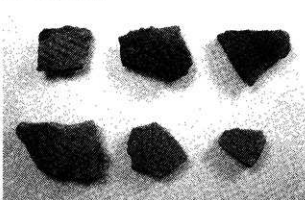
1. 調査区域全景



2. T2拡張部土層



3. T3遺構確認面検出状況



4. 出土遺物(1~6)

調査のまとめ

本跡の主体が、弥生時代から奈良・平安時代にわたる集落ではあるが、過去19回の調査で明らかとなってきたところでは、遺跡の中央部から西側には違った側面の川崎山遺跡があることがわかってきた。今回の調査においても、その一端が何うことができた。今後も、丹念で正確な調査により、ひとつの台地における各時代の土地利用を解明する資料が得られることが期待される。

3. 向山遺跡 i 地点

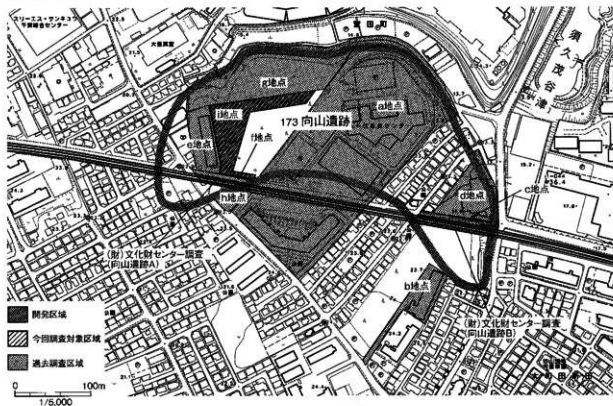
遺跡の立地と概要

向山遺跡は、市域の中央部、大和旧新田地区に所在する。新川の中流域で左岸から合流する「須久茂谷津」を約1,500m遡った谷津中流域の左岸の台地上に立地する。本跡が立地する台地は、南下する須久茂谷津が大きく、緩やかに西に方向を変え、また、小谷津が台地の北側を回りこみながら開折し、須久茂谷津に合流した結果、円形状の舌状台地が形成された。この台地は、河岸段丘の下総下断面で、標高23mから24mのほぼ平坦な地形をしている。

本跡の規模は、東西方向で約430m、南北方向で約200mである。

本跡の調査は、昭和56年にグラウンドの建設を原因として行われた調査を最初に、10回にわたって行われている。これらの調査では、旧石器時代から縄文時代前期から中期の遺構・遺物がまばらに検出されている。

今回の調査区域 i 地点は、本跡の西側の台地平坦部で、北側から回り込む谷津から、やや奥に入った地点に位置する。

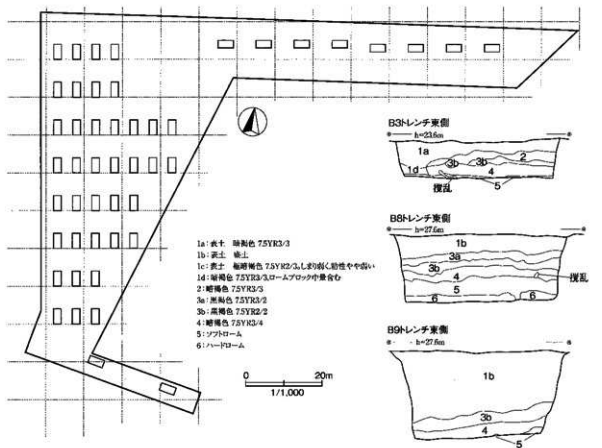


第8図 向山遺跡 i 地点位置図

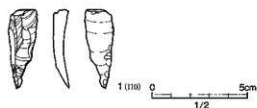
第3表 向山遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	12,000	確認	なし	旧石器時代 ボイント 縄文土器 (前期土器)	自治会	S56.5	未報告
	12,000	本調査	上坑、竪上跡	旧石器時代 ボイント、ナイフ形石器、縄文土器 (前期～中期)		S56.7～ S56.9	
b	322.8	確認	時期不明 上坑1	縄文土器 中期	市教委	H12.12	市内H13
	2383.06						
c	52.630	確認	縄文時代 上坑2	旧石器時代 剥片 縄文土器 (前期末～中期初～中期何玉台式)	市教委	H13.11	※1
	30.630						
d	380.3358	確認	なし	縄文土器 (前期末～中期初) 奈良・平安時代 灰山尊	市教委	H17.10	市内H18
e	285.2397.73	確認	なし	なし	市教委	H18.1	市内H20
	21.2397.73						
f	101.186	確認	なし	なし	市教委	H19.5	※1
	11.486						
g	792.10813.85	確認	なし	縄文時代 石器	市教委	H23.12	市内H24
	80.820.86						
向山A	785	本調査	なし	先土器時代 石器、縄文土器	(前) 市委 縄文土器 センター	H1.6～ H1.7	※2
向山B	1312	本調査	縄文時代 土坑1	先土器時代 石器、縄文土器		H1.8～ H1.9	

※1 「公共事業調査発掘調査報告書」 ※2 「八千代市埋蔵遺跡・上の台遺跡」 抜



第9図 i 地点トレンチ配置図・土層断面図



第10図 向山遺跡 i 地点出土遺物

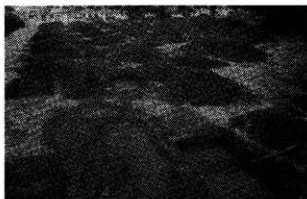
調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、任意に10m方眼を組み、2m×4mのトレンチを規則的に設定した。掘削は、遺構確認面であるソフトローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出確認作業、土層の分析を行った。

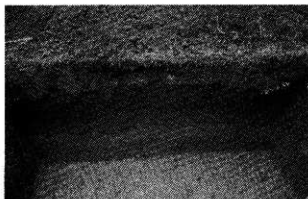
この調査での標高は、調査区付近で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年6月19日から7月4日まで行われた。19日木曜日、調査区の設定。20日金曜日、重機により、表土除去作業を開始。以降25日まで表土除去作業及び遺構検出作業を継続。26日木曜日、I10グリッド内のトレンチのソフトローム上面から石器の出土を確認。土層実測。30日月曜日、土層の実測等を

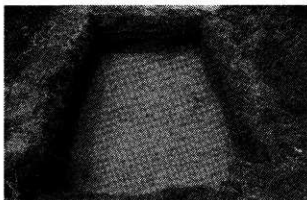
図版3 向山遺跡I地点



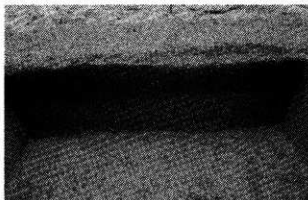
1. 調査区域全景



2. B8トレンチ東面土層



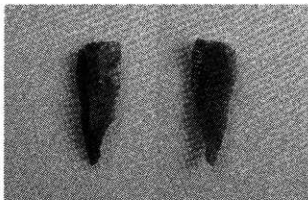
3. B7トレンチ遺構確認面検出状況



4. I10トレンチ土層



5. D7トレンチ遺構検出状況



6. 出土遺物(I)

行う。7月3日木曜日、埋め戻し開始、4日金曜日、埋め戻しが終了し、調査を完了した。

調査の概要

調査区は、遺跡の西側に位置し、台地の縁辺部から離れ、ほぼ平坦な地形とみられる。しかし、上層図から判断すると、部分的に4mほどの小高い場所があるようだが、位置はわからない。盛土のため高低差を生じた可能性もあるが、いずれにしても不明である。

調査区の上層は、部分的に盛土がみられるが、現地表面から50cmから1mほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出されている。

発掘調査は、調査対象面積5,250㎡に対して、トレンチ48か所、掘削面積は384㎡(調査では364㎡)、7.31%の面積を掘削し調査した。調査では下層の調査は行われていないことになっているが、調査日誌では数ヶ所深堀による下層調査が行われている。

調査の結果、遺構は検出されなかった。出土遺物はチャートの剥片を加工した石器が1点、ソフトローム中から出土するが、グリッド名称が不明のため出土位置はわからない。

調査のまとめ

本跡の全体像は未報告の調査もあり正確にはつかめないが、今回の調査においても石器1点のみの出土であり、出土位置も不明なこともあり、旧石器が散発的に出土する遺跡である以上には新たな知見は得られていない。

4. 殿内遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

殿内遺跡は、市域の中央部、村上地区に所在する。新川の中流域に、右岸から合流する「上相女谷津」を約500m遡った左岸のさらに小さな谷津の奥に形成された舌状台地上に立地する。この台地は、河岸段丘の下縁上位面で形成され、標高26mから27mのほぼ平坦な地形を呈している。

遺跡の規模は、南北方向約320m、東西方向約190mである。

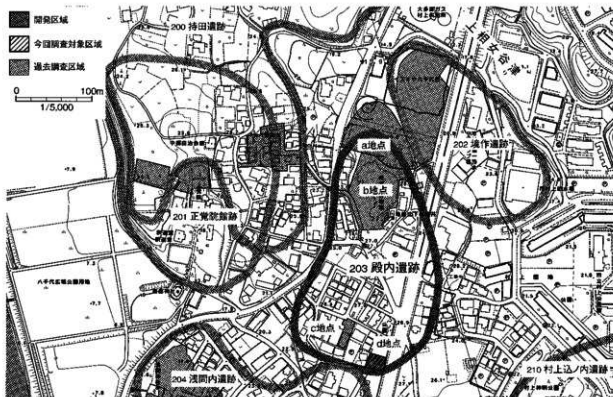
本跡の調査は、昭和60年、大規模商業施設建設を原因とした a 地点の調査と平成2年から4年にかけて行われた2度にわたる b 地点の本調査により、古墳時代から奈良・平安時代を中心とする遺跡であること

第4表 殿内遺跡の調査

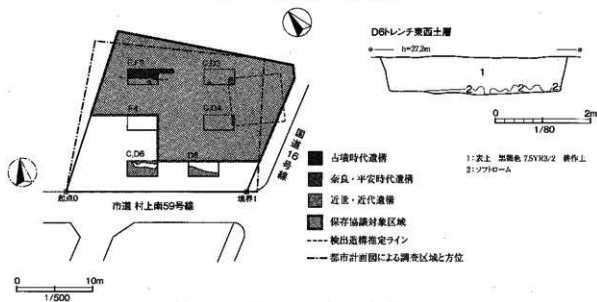
地点	調査面積 (㎡)	調査種類	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	81,500	確認				569.9	※1
	800	本調査	奈良時代 聖穴遺物1	土師器、須恵器	調査会	581.1	
b	466.5/4,900	1次埋戻	古墳時代前期 聖穴遺物1 同 後期 聖穴遺物5	旧石器時代 ナイフ形石器 縄文石器 (中股細管形式) 古墳時代前期・後期 土師器 奈良・平安時代 土師器、 須恵器、鉄器刀子、紡錘車等		E2.8	※2
	4,800	1次本調査	奈良・平安時代 聖穴遺物31、 竪立柱遺物1、土坑		市教委	H2.10～ H3.7	
	500	2次確認本調査	奈良・平安時代 聖穴遺物2 遺構 上築6、不明構3	奈良平安時代 土師器、須恵器 近畿 陶磁器、瓦木造	市教委	H4.6～ H1.9	
c	64.3/69.95	確認	奈良・平安時代 聖穴遺物7、 竪立柱遺物2、土坑9	奈良平安時代 土師器、須恵器	市教委	H7.11	市四118

※1 「八千代寺南作遺跡・殿内遺跡」 ※2 「千原八千代市域内遺跡」 b 地点

が明らかとなってきた。また、平成17年には、b地点から南に約120m離れたc地点で確認調査が行われ、奈良・平安時代の遺構が検出されている。



第11図 殿内遺跡d地点位置図



第12図 d地点トレンチ配置図・土層断面図



第13図 殿内遺跡d地点出土遺物

本跡の周辺には、東側に浅い谷津を挟んで境作遺跡(202)が立地し、西側にも浅い谷津を挟んで持田遺跡(200)が立地している。さらに、南側の台地の続きには、浅間内遺跡(204)が近接するという環境にある。

今回の調査区域d地点は、本跡の南側の台地平坦面、c地点より約30m東に位置する。市道を挟んで南側に浅間内遺跡がせまる。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせ、基点0と境界1を基線にして方眼を組み、方眼に沿って2m×4mのトレンチを設定した。掘削は遺構確認面を人力により検出後、遺構確認面としたソフトローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出確認作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区付近で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年7月4日から7月10日まで行った。4日金曜日、調査区の設定、人力でのトレンチ掘削を行った。7日月曜日、重機による表土除去作業。いくつかの地点で遺構検出。8日火曜日、遺構の精査を行う。土層の実測や写真などの記録作業を行う。10日木曜日、埋め戻し作業を実施し、調査を完了。

調査の概要

調査区は、遺跡の南端に位置し、遺跡北端のa地点からほぼ平坦な地形である。調査区の土層は、現地表面より40cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出され、その間には耕作土の表土層のみであった。

発掘調査は、調査対象面積456㎡に対して、トレンチ6か所、掘削面積は48㎡、10.53%の面積を掘削し、調査した。

調査の結果、古墳時代後期の竪穴建物1軒、奈良・平安時代の竪穴建物1軒、同土坑2基が検出された。出土遺物の総数は、84点。その内訳は、土師器71点、須恵器5点、支脚3点、粘土塊3点であり、その大半はF3トレンチから出土し、古墳時代後期のものであった。よって、このトレンチから検出された遺構は、同時期のものと判断された。また、CD3、4トレンチから出土した土師器は、ロクロ成形の坏などであり、奈良・平安時代のものと判断された。その他に陶器1点、縄文時代中期阿玉台式土器1点などが出土している。

第13図の1は、縄文土器、中期阿玉台式土器、底部片。白色砂粒や金雲母等の混入。2は土師器、丸底の坏。3は土製の支脚片。中心に半円状の細い空洞が貫く。4は、土師器の坏、底部に回転糸切痕あり。

調査のまとめ

今回の調査区域d地点における調査の結果、古墳時代後期と奈良・平安時代のそれぞれの竪穴建物が検出された。c地点に引き続き、浅間内遺跡と殿内遺跡の中間地点において、建物群が検出されたことの意味は大きく、問題をさらに複雑にした。それぞれの遺跡をどのように捉えていくのかについて、この地点周辺での資料の増加を待ちたい。また、周辺に密集して立地する遺跡間の関係もあわせて検討していくことも重要であろう。

※ トレンチ配置図は、事業者から提供された測量図等を用いて作図したが、2500分の1の都市計画図に当てはめると、方位や土地形状に大きなズレが生じた。そのため、提供された測量図は、あまり正確なものでないとみられ、第12図トレンチ配置図に都市計画図から作成した調査区域と方位(座標北)を基点0を基準にして、記載することとした。

図版4 殿内遺跡d地点



1. 調査区域全景



2. D6トレンチ土層



3. C, D3トレンチ遺構検出状況



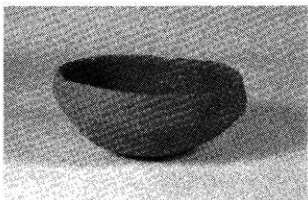
4. C, D4トレンチ遺構検出状況



5. F3トレンチ遺構検出状況



6. 出土遺物(1, 3, 4)



7. 出土遺物(2)

5. 真木野前遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

真木野前遺跡は、市域の北部、真木野地区に所在する。神崎川の右岸の標高10mから14mの低位の河岸段丘 千葉段丘面上に立地する。遺跡の規模は東西方向約200m、南北方向約180mである。

本跡の西側には上位段丘の下総下位面上に真木野遺跡(10)が立地する。また、東側には浅い谷津をはさんで瓜ヶ作遺跡(267)と松原遺跡(11)が立地している。昭和58年時点では、松原遺跡に瓜ヶ作遺跡と真木野前遺跡が含まれ、同一の遺跡として扱われていたが、平成9年の改訂の時点で分割、整理された。

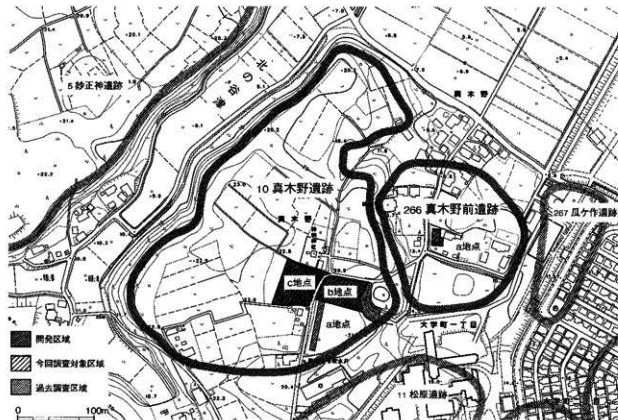
今回の調査は、本跡における最初の発掘調査である。隣接する瓜ヶ作遺跡や松原遺跡では大規模開発に伴い調査が行われ、遺跡の全容が明らかになってきた。瓜ヶ作遺跡は本跡と同様に低位段丘面上の遺跡で縄文時代早期から中期までの竪穴や堅穴建物などのほか弥生時代後期、奈良・平安時代の堅穴建物も検出されている。また、松原遺跡は瓜ヶ作遺跡の上位の段丘面上に立地し、古墳時代前期を中心にして、弥生時代後期から奈良・平安時代の堅穴建物群が検出されている。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区に既存の住宅があるため、任意に2m×4mのトレンチを設定した。掘削は遺構確認面まで人力により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年7月22日から23日まで行われた。22日火曜日、トレンチの設定、掘削を開始。土層の分層と記録写真。23日水曜日、土層実測。埋め戻しを行い、調査を完了した。



第14図 真木野前遺跡 a 地点・真木野遺跡 b 地点, c 地点位置図

調査の概要

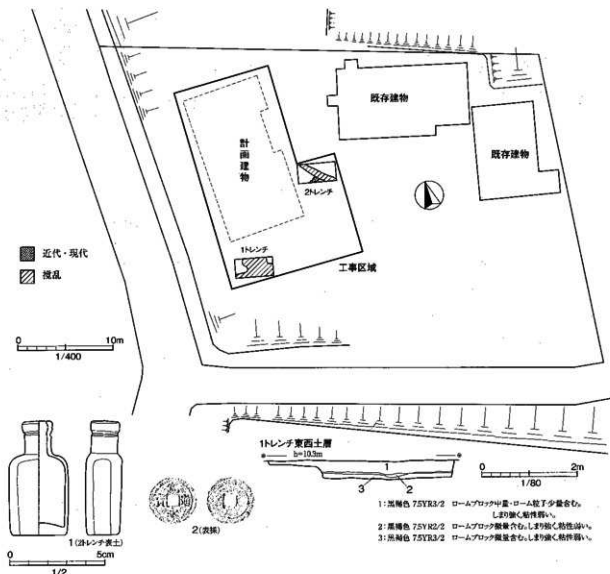
調査区は、低位段丘面上に立地するが、上位の段丘との段丘崖に近い。地形的には平坦に見えるが、既存住宅のため削平されていることが想定される。

調査区の土層は、現地表面より30cmから50cmほどで遺構確認面としたローム層が検出された。1トレンチの掘削中に水が湧いてきたが、段丘崖に近いためであろうか。

発掘調査は、調査対象面積 287.13㎡に対して、トレンチ2か所、掘削面積は16㎡、5.57%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構は検出されていない。出土遺物は土師器の小片が2点、ガラス小瓶(1) 1点、寛永通宝(2) 1点であった。

調査のまとめ

既存住宅がある中での調査のため、十分な調査を行えたとはいえないが、本跡理解のための端緒となった。今回の調査では、遺構は検出されず、出土遺物もほとんどない。周辺の地形から判断すると宅地にするために傾斜地を削平しているためかもしれない。出土した寛永通宝(2)は、寛文年間以降に鑄銭された

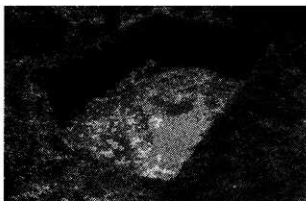


第15図 真木野前遺跡a地点トレンチ配置図・土層断面図・出土遺物

図版5 真木野前遺跡 a 地点



1. 調査区域全景



2. T1トレンチ掘削状況



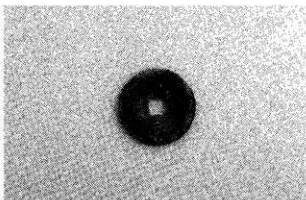
3. T2トレンチ掘削状況



4. T2トレンチ十層



5. 出土遺物(1)



6. 出土遺物(2)

新寛永、鑄造地等は不明。ガラス小瓶(1)は薬瓶であろうか。

6. 真木野遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

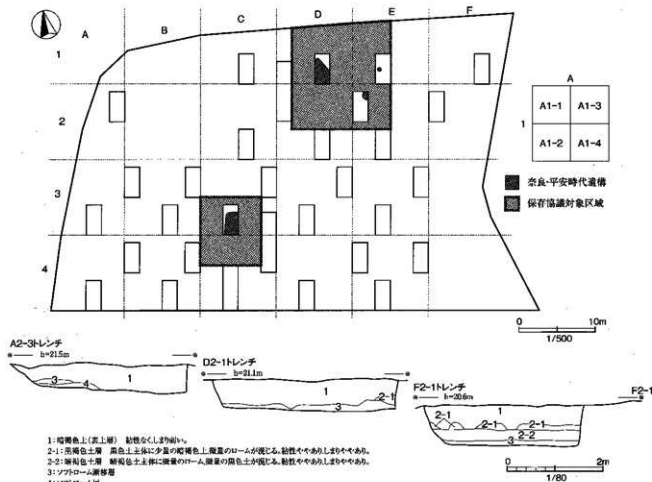
真木野遺跡は、市域の北部、真木野地区に所在する。神崎川の右岸の標高20mから23mの河岸段丘の下総下位面上に立地する。本跡の東側には下位の千葉段丘面上に真木野前遺跡(266)が立地する。遺跡の規模は北東-南西方向約470m、北西-南東方向約280mである。

今回の調査は、本跡における2回日の発掘調査であった。前回の調査 a 地点は、昭和62年隣接する大規

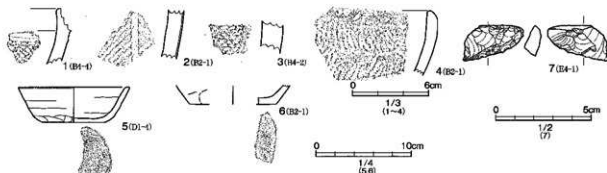
模開発事業の付帯工事のために確認調査及び本調査が実施された。確認調査は現道を拡幅する区域、本調査は台地を掘削して新たな道路を建設する区域であった。いずれも、開発事業の工事用車両の進入路として工事が行われたものである。本調査区域は道路が建設され、掘削されたが、確認調査を行った区域は、山林として旧状に復帰し現状保存された。今回の開発区域はa地点の区域を含んで計画された。

第5表 真木野遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	800	確認 本調査	奈良・平安時代 墓穴建物ら他 奈良・平安時代 墓穴建物2	奈良平安時代 土器器、銅器器	調査会	562.10~ 562.11	未報告



第16図 真木野遺跡b地点トレンチ配置図・土層断面図



第17図 真木野遺跡b地点出土遺物

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、開発区域南端の境界線を基準線にして、任意に10m方眼を組み、この方眼を4分割した5m四方の小グリッド単位に2m×4mのトレンチを設定することを基本とした。掘削は遺構確認面を人力により確認後、遺構確認面としたローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年11月4日から11月14日まで行われた。4日火曜日、機材搬入、5日水曜日、杭打ち。6日木曜日、調査区・トレンチの設定、人力での掘削を開始。同時に重機による表土除去作業開始。7日金曜日、平行して清掃・遺構検出作業を開始。10日月曜日から12日水曜日まで同作業を継続。12日から13日木曜日まで写真撮影等記録作業を行う。13日、補足調査のため追加トレンチを設定、重機による表土除去を行う。表土除去作業を終了。埋め戻し作業開始。14日金曜日、埋め戻しが終了し、調査を完了した。

調査の概要

調査区は、遺跡の中央よりやや南東側に位置している。調査区の東側に段丘崖があり、南側にも遺跡を区分する小さな谷津が北東側から入り込んでいる。調査区は東側にわずかに傾斜し、調査区域内での東西の高低差が1mほどある。

調査区の土層は、現地表面より30cmから90cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。その間は表土層のみの部分もあり、一部には盛土の堆積もみられた。b地点の一部にはa地点の工事区域と重複する場所もあり、工事のための土砂の移動があったものと考えられる。

発掘調査は、調査対象面積2,748.54㎡に対して、トレンチ31か所、掘削面積は270㎡、全体の9.82%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物が2軒、同時期の土坑2基が検出されている。確認調査による出土遺物は、総数120点ほどであった。内訳は、縄文土器が15点で中期、加曾利E3からE4の時期の土器(1~4)が5点、後期が1点であった。土師器(5,6)は89点、須恵器が6点で、奈良・平安時代のものが中心であった。その他に黒曜石の剥片(7)が1点、礫類7点、その他不明なもの2点である。

調査のまとめ

本跡で行われた過去の調査区域と今回の調査区域が重複していることもあり、調査の成果は、ほぼ同一の方向性を示している。今回の調査では、奈良・平安時代と想定される竪穴建物2軒のだけであったが、a地点の成果を含めるとこの地区で、a地点本調査区域で2軒、確認調査区域で5軒の奈良・平安時代の竪穴建物が確認されており、合計9軒となり、奈良・平安時代の集落の一部であることが再確認された。

今回の調査成果により、保存協議の対象となる区域は2ヶ所、合計面積248㎡となった。建設工事の内容から遺跡の保存が可能であったため、工事後現状保存されることとなった。

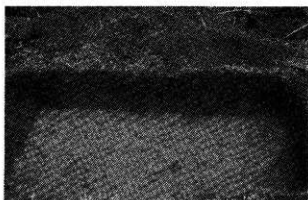
図版6 真木野遺跡b地点



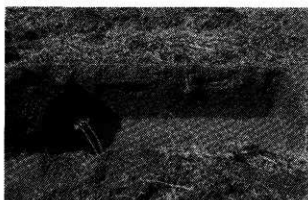
1. 調査区南側



2. 調査区東側



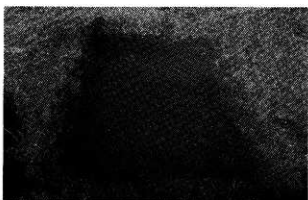
3. D2-1トレンチ土層



4. F2-1トレンチ上層



5. C3-2トレンチ遺構検出状況



6. D1-4トレンチ遺構検出状況



7. 出土遺物(1~4, 7)



8. 出土遺物(5, 6)

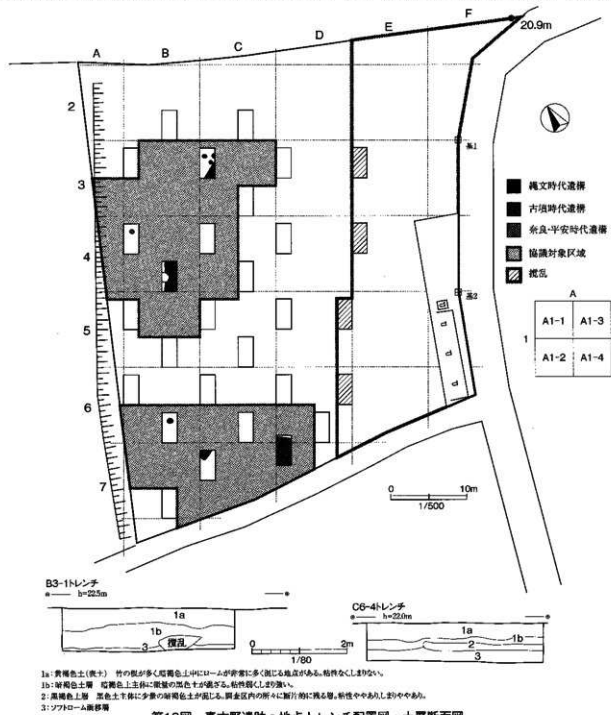
7. 真木野遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

本跡 c 地点は、前述の b 地点の道路を隔てた西側に隣接する。遺跡の中心部分よりやや南側、台地中央付近に立地する。地形は、ほぼ平坦な地形であるが、東に向かってやや傾斜する。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、基1-基2（第18図）を基線に10m単位に方眼を組み、この方眼を4分割した5m四方の小グリッド単位に2m×4mのトレンチを設定することを基本とした。掘削は遺



第18図 真木野遺跡 c 地点トレンチ配置図・土層断面図

構確認面を人力により確認後、遺構確認面としたローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出確認作業、上層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

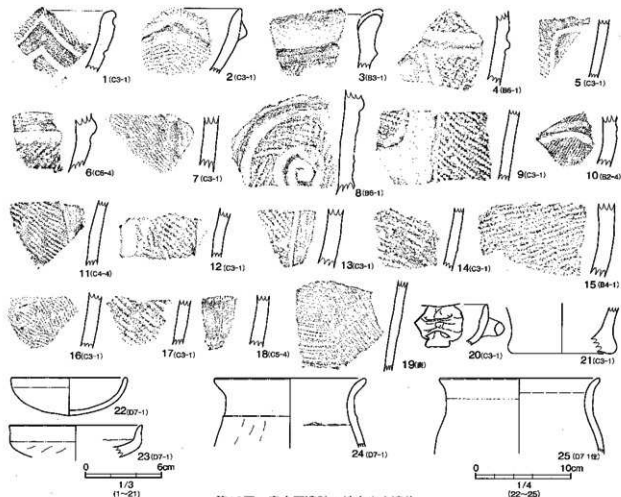
調査は、平成27年3月16日から3月23日まで行われた。16日月曜日、機材搬入、調査区及びトレンチの設定。17日火曜日、トレンチ設定の続き、人力での掘削を開始。縄文土器の出土を確認。18日水曜日、重機による表土除去作業開始。遺構検出作業開始。19日木曜日、重機での掘削作業終了。検出作業継続。20日金曜日、検出作業完了。遺構検出状況等記録写真撮影。23日月曜日、土層実測。埋め戻しは事業者側で行うことになり、調査を完了した。

調査の概要

調査区の土層は、現地表面より40cmから50cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。地表面から2から3層の自然堆積がみられた。また、区域東側の道路際一帯が掘削、埋め土されていた。

発掘調査は、調査対象面積 2,693㎡に対して、トレンチ29か所、掘削面積は232㎡、全体の8.61%の面積を調査した。調査区域の東側E・Fグリッドの大半が擾乱されていたため、調査を行っていない。

調査の結果、遺構は縄文時代中期の竪穴建物1軒、縄文時代の土坑4基、古墳時代後期の竪穴建物3軒、奈良・平安時代の土坑1基が検出されている。出土遺物は総数234点出土している。内訳は縄文土器(1-



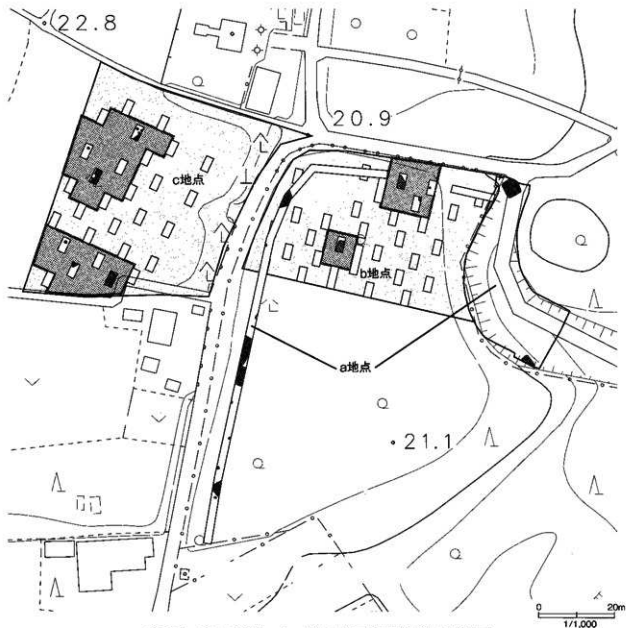
第19図 真木野遺跡c地点出土遺物

21)が164点で、大半が中期加曾利E3からE4式土器で、その内の大半の108点がC3-1トレンチから出土している。その他に土師器(22~25)が67点、須恵器1点、その他陶器8点、礫類4点が出土した。土師器は古墳時代後期のものが中心で、その大半の49点がD7-1トレンチから出土している。

調査のまとめ

今回の調査区c地点の調査により、前述のb地点と比較して、その様相に大きな相違がみられた。b地点から道路ひとつ隔てた本地点では、縄文時代中期の竪穴建物が検出され、この時期の集落の存在を伺わせた。さらに、古墳時代後期の集落の一端も見出され、奈良・平安時代を中心としたa b地点とは大きく様相を異にしている。本跡の調査がまだ、南半の一部分にとどまっており、この遺跡の更なる解明が期待される。

調査の結果、保存協議の対象となる区域が2ヶ所、合計面積707㎡であった。また、建設工事の内容が

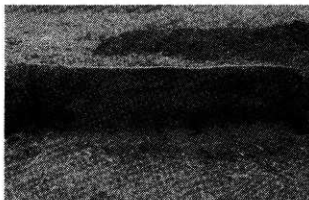


第20図 真木野遺跡 a, b, c 地点調査区域及び遺構検出状況図

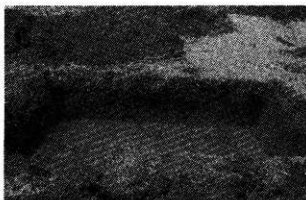
図版7 真木野遺跡c地点



1. 調査区全景



2. B3-1トレンチ上層



3. C6-4トレンチ上層



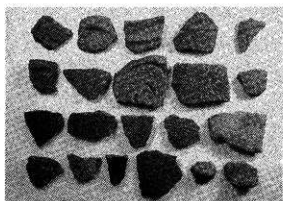
4. C3-1トレンチ遺構検出状況



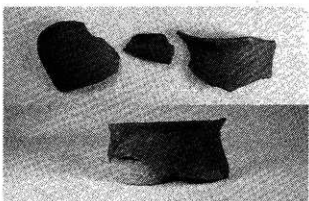
5. D7-1トレンチ遺構検出状況



6. B4-1トレンチ遺構検出状況



7. 出土遺物(1~21)



8. 出土遺物(22~25)

ら遺跡の保存が可能であったため、工事後、現状保存されることとなった。

8. 北裏畑遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

北裏畑遺跡は、市城の南部、萱田町地区に所在する。新川の中流域で左岸から流れ込む「上の谷津」の奥、約400m遡った舌状台地上に立地する。この谷津の北側の台地上には川崎山遺跡(241)が立地し、また、南側の台地上には上の山遺跡(243)、上の山古墳(244)が立地している。

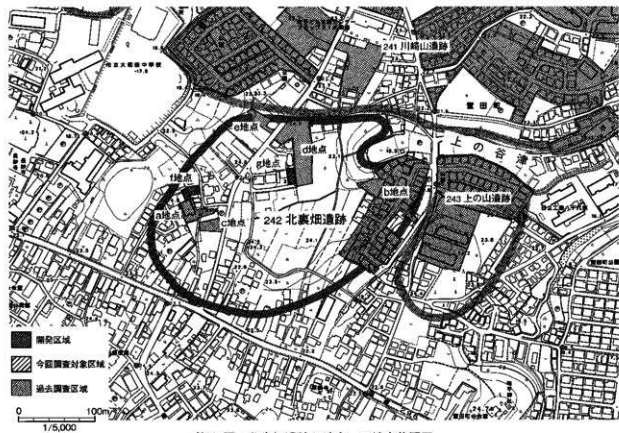
本跡の規模は、北東-南西方向約370m、北西-南東方向の最大幅約280mである。

本跡の調査は過去5回行われている。いずれの調査も集落などの痕跡は確認されていない。縄文時代の陥穴が散発的に検出されるが、縄文土器そのものの出土はみられず、詳細な時期は不明である。それ以外には近世以降の土坑や溝が検出され、カワラケや陶磁器の出土がある。歴史的な背景としては、江戸時代に成田街道の火和田宿として賑わった街並みの背後に位置している。

第6表 北裏畑遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査範囲	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	115-710	雑草	なし	近世・近代陶磁器等	市教委	H124	市内H13
b	500/5,250	雑草	縄文時代陥穴1 近世土坑1 検上陥土坑2 溝2	近世・近代陶磁器、瓦片	市教委	H17.11	中1
c	12/121.99	雑草	近世・近代土坑3	なし	市教委	H23.6	市内H24
d	240/2,363.25	雑草	縄文時代陥穴1	縄文時代石鏃 近世陶器、瓦面子	市教委	H24.2	市内H24
e	44/411	雑草	近世・近代溝1	近世かわらけ	市教委	H25.1	市内H25

■ | 不特定発掘発掘調査報告書V |



第21図 北裏畑遺跡 f 地点、g 地点位置図

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の規模が小さいため、計画建物を避けて任意にトレンチを設定した。掘削は遺構確認面を人力により確認後、遺構確認面としたローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

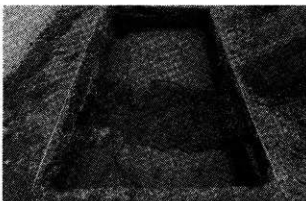
調査は、平成26年8月11日から8月14日まで行われた。11日月曜日、トレンチの設定、人力での掘削を開始。12日火曜日、重機による表土除去作業を実施し完了する。遺構検出作業開始。写真撮影等の記録作業を行う。13日水曜日、土層実測。Aトレンチで検出された溝状遺構にサブトレンチを掘削。14日木曜日、重機による埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査の概要

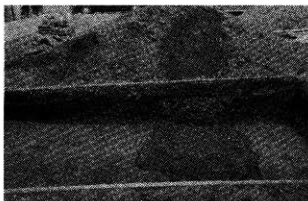
調査区は、遺跡の西端に位置し、川崎山遺跡と本跡を区分する小さな谷津の奥に立地する。

調査区の土層は、現地表面より40cmから50cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。また、表上下で旧表土層が確認され、調査区域全体に20cmから40cmの盛土が行われ、現地表面が形成されていることが確認された。

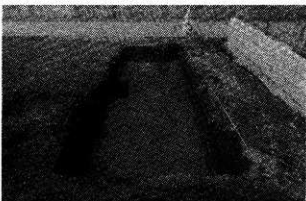
発掘調査は、調査対象面積 284.26㎡に対して、トレンチ3か所、掘削面積は21.5㎡、全体の7.56%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構としては近世以降の溝跡1条が検出されている。出土遺物は、陶磁器2点、素焼きの土器2点のほか寛永通宝(1)が1点出土した。出土した寛永通宝(1)は寛文以降に鋳造版8 北裏畑遺跡f地点



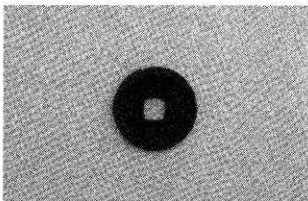
1. Aトレンチ確認検出状況



2. Aトレンチ土層



3. Cトレンチ確認検出状況

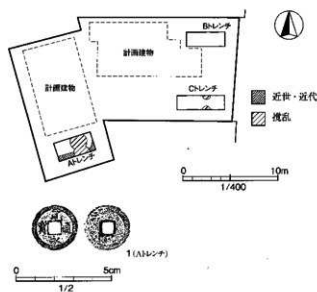


4. 出土遺物(1)

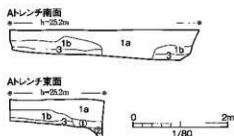
造された新寛永である。鑄銭地は不明。

調査のまとめ

今回の調査区 f 地点においても、近世以降の溝跡 1 条のほかに遺構の検出はみられなかった。出土遺物では銭貨(寛永通宝)の出土のほか、陶磁器と素焼きの土器の小片のみであった。



第22図 f 地点トレンチ配置図・土層断面図・出土遺物



- 1a: 灰土 暗褐色土層 土上でローム粒のほとんど多く含む。粘性なくしっとりなし。
 1b: 灰土上 暗褐色土 暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる。粘性弱くしっとりややあり。
 3: ソフトローム層跡
 溝の埋土
 ①: 暗褐色土 暗褐色土を主体に少量の黒色土少量のロームが混ざる。粘性弱くしっとりなし。
 ②: 暗褐色土 暗褐色土を主体としながらも多数のロームと少量の黒色土が混ざる。粘性ややありしっとりややあり。

9. 北裏畑遺跡 g 地点

遺跡の立地と概要

北裏畑遺跡 g 地点は、遺跡北側の川崎山遺跡との境界となる谷津尻に立地する。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、任意に 2m × 4m のトレンチを設定した。掘削は人力により遺構確認面としたローム上面まで表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣の街区基準 補助点3B323 (X=-30967.127 Y=24702.18 H=24.47 補正済み)を基準に計測した。

調査は、平成27年3月9日から3月12日まで行われた。

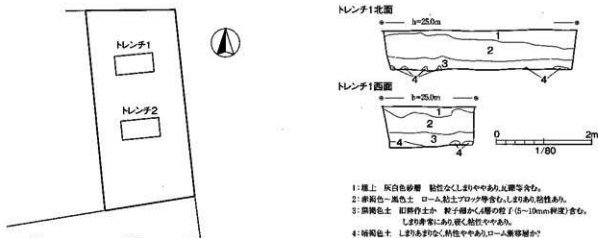
調査の概要

調査区の土層は、現地表面より80cmから90cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。地表面から60cmほどの盛土がみられ、その下層には、自然堆積も残存していた。

発掘調査は、調査対象面積 189.95㎡に対して、トレンチ 2 か所、掘削面積は16㎡、全体の8.42%の掘削を行い、調査した。この調査の結果、遺構・遺物の検出はみられない。

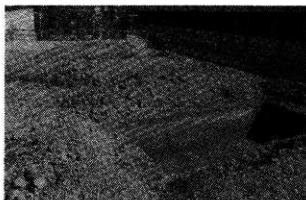
調査のまとめ

今回の調査区g地点において、遺構の検出はなく、出土遺物もなかった。

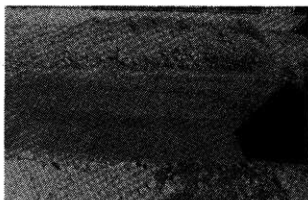


第23図 g地点トレンチ配置図・土層断面図

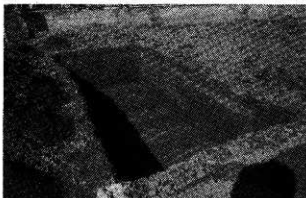
図版9 北裏畑遺跡g地点



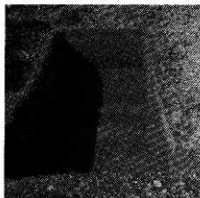
1. 調査区全景



2. トレンチ1北壁土層



3. トレンチ2北・西壁土層



4. トレンチ2掘削状況

10. 神野遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

神野遺跡は市域の北東部、神野地区に所在する。

また、本跡は新川の下流域、印旛沼河口部の南岸の台地上に立地する。戦後行われた印旛沼の干拓において、沼の西端部が埋め立てられて新川の一部となったことにより、現在の地形からは、本跡が新川の河岸の台地上に立地しているように見えるが、旧来の地形からすれば、蛇行する沼の西端部の南岸に立地することになる。

本跡は台地の大半を占め、下総下位面上に展開する広範囲な遺跡として認識される。規模は東西方向約780m、南北方向約500mである。

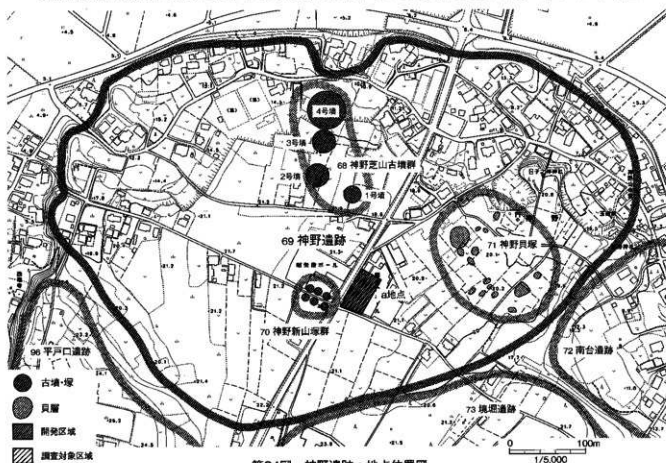
遺跡の区域内には他の遺跡も重複して立地している。遺跡東側には神野貝塚(71)が良好な状態で遺存している。また、遺跡の中央北側には神野芝山古墳群(68)が存在したが、戦後の土取り工事などで壊滅し、現存していない。さらに、遺跡中央には、神野新山塚群(70)が現在でも一部現存している。

このように多面性を有する広域な遺跡であるが、市街化調整区域に位置付けられていたため、ほとんど開発事業が行われず、比較的良好に保存が保たれていた。

今回の調査区域は、本跡における発掘調査としては最初の事例となる。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて10m方眼を組み、それを4分割した5m四方の小グリッド単位に



第24図 神野遺跡 a 地点位置図

2m×4mのトレンチを設定することを基本とした。掘削は遺構確認面を人力により確認後、遺構確認面としたローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年8月29日から9月5日まで行われた。8月29日金曜日、下草の繁茂が激しいため、下草刈り等の環境整備を行う。9月1日月曜日、下草刈り継続。杭打ち作業、調査区の設定。2日火曜日、下草刈り継続。基準杭設定。トレンチ設定。人力での掘削を開始。3日水曜日、重機による表土除去作業実施。遺構検出作業開始。土層分析。4日木曜日、遺構検出作業継続。土層実測、記録作業。5日金曜日、遺構検出作業終了。土層記録作業終了。重機による埋め戻し作業を行い、調査を完了した。

調査の概要

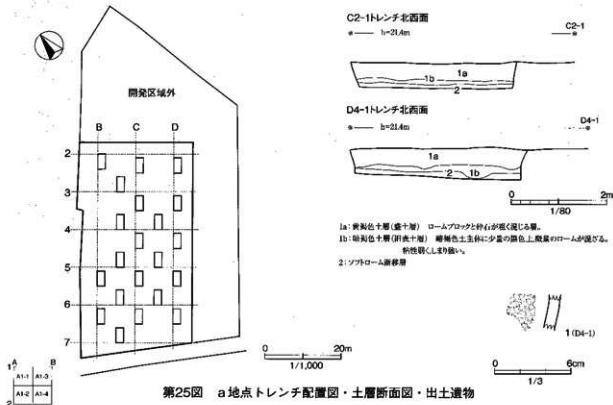
上場跡地の一部分が開発予定区域となっていたため、当該区域のみが調査対象となった。調査区域は遺跡のほぼ中央に位置し、標高21m前後のほぼ平坦な地形であった。

調査区の土層は、現地表面より40cmほどの厚みの盛土層がみられたが、その下には旧表土層も残存していた。土層の圧縮もあるが、旧地表面下30cmで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。

発掘調査は、調査対象面積1,613㎡に対して、トレンチ21か所、掘削面積は168㎡、全体の10.41%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構は検出されなかった。また、出土遺物は縄文土器の小片(1)が1点のみであった。

調査のまとめ

江戸期に佐倉城へ行く道として利用された通称「さくらみち」が調査区域の脇をとり、その道路の両側には塚群が並び、本市には数少ない縄文時代後期の貝塚や古墳群などの立地する歴史豊かな地域である



が、今回の調査区では、遺構遺物をほとんど検出できなかった。遺跡中央部の遺構の希薄な部分と考えられ、本跡の姿を垣間見ることができなかった。

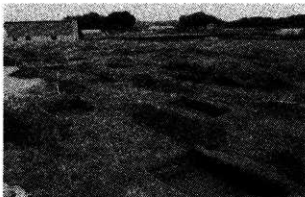
※24図の参考文献 常松成人「新川流域の貝塚」『11塚研究』1999

「八千代市神野芝山2号墳発掘調査概要」『八千代市遺跡分布調査概要』昭和47年 八千代市教育委員会

図版10 神野遺跡 a 地点



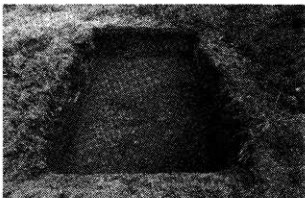
1. 調査区全景



2. 調査区全景



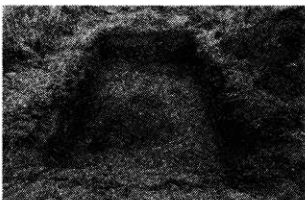
3. C2-1トレンチ土層



4. C3-4トレンチ遺構確認面検出状況



5. D4-1トレンチ土層



6. C5-4トレンチ確認面検出状況



7. 出土遺物(1)

11. 新東原遺跡m地点

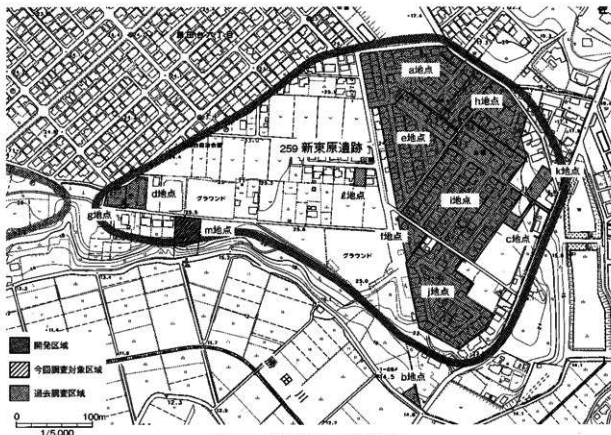
遺跡の立地と概要

新東原遺跡は、市域の南東部、千葉市との市境付近に位置し、勝田地区に所在する。新川のの上流域は勝田川と呼ばれており、本跡はその右岸の台地上に立地する。勝田川-新川流域における下総上位面の河岸段丘上に広がる遺跡である。遺跡南端には、千葉段丘面もわずかにみられる。

第7表 新東原遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査時期	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	364/9,719 690	確認 本調査	縄文時代(後期)土坑18 竪穴10坑11	縄文土器(後期 粘膏製3式)	市教委 調査会	H11.6 H13.12	市内H14 市上
b	71/330 25	確認 本調査	縄文時代(後期)竪穴遺構1	縄文土器、礫	市教委	H14.4	市内H15
c	上層 112/948.29 下層 4/948.29	確認 なし	なし	縄文土器	市教委	H14.10	市内H15
d	上層 144/1,065.39 下層 4/1,065.39	確認 なし	なし	縄文土器、縄文時代石器	市教委	H15.4	市内H16
e	上層 1,080/9,574 下層 116/9,574 下層 81	確認 本調査	旧石器時代 土土層点1 時期不明 土坑5	旧石器時代 燧石片 縄文土器	市教委	H16.11	市内H17
f	上層 119/1,153 下層 12/1,153	確認 なし	時期不明 土坑2	縄文土器	市教委	H16.12	市内H17
g	上層 64/396.77 下層 8/396.77	確認 なし	なし	なし	市教委	H17.6	市内H18
h	432/6,242	確認 本調査	時期不明 土坑2	縄文土器	市教委	H18.5	市内H19
i	1,312/15,893 34	確認 本調査	縄文時代 竪穴1、土坑1	縄文土器	市教委	H20.6 H20.7	市内H21 未報告
j	1,066/9,472 400	確認 本調査	奈良・平安時代 溝2、方形周溝1	旧石器時代 燧石、縄文土器 奈良・平安時代 土師器	市教委	H21.9 H22.5	市内H22 本報告
k	78/777.30	確認 なし	なし	なし	市教委	H24.11	市内H25
l	30/335.80	確認 なし	なし	なし	市教委	H25.3	市内H25

※1「新東原遺跡の地点発掘調査報告書」



第26図 新東原遺跡m地点位置図

本跡の規模は、東西方向約620m、南北方向の最大幅約420mである。

本跡の調査事例は、平成13年以降12地点に及ぶ。これらの開発により、本跡の東半分は住宅地と化した。

これらの調査の結果から、古くは旧石器時代の石器出土の集中地点が検出され、縄文時代では中期、後期の土坑や陥穴などが散見されるが、台地上には建物群としての集落はまだ確認されていない。遺跡南端の狭い千葉段丘面に縄文時代後期の建物跡が1軒確認されているのみである。奈良・平安時代の痕跡もわずかにみられるが、明確な集落などの検出にはいたっていない。

隣接する佐倉市志津周辺には江戸時代、佐倉藩の砲術練習所があり、明治期になるとそれを引き継いだ陸軍の射撃演習場が設置された。そのため、勝田周辺にも誤射されたとみられる砲弾やその破片が多く出土している。

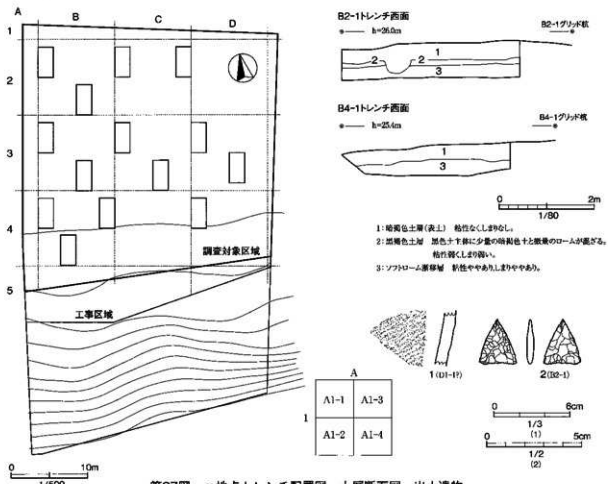
今回の調査区m地点は、本跡の西側に位置し、勝田川を望む段丘崖の台地縁辺に立地する。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、任意に10m方眼を組み、それを4分割した5m四方の小グリッド単位に2m×4mのトレンチを設定することを基本とした。掘削は遺構確認面を人力により確認後、ローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年9月12日から9月22日まで行われた。12日金曜日、機材搬入、基本杭設置、調査トレ



第27図 m地点トレンチ配置図・土層断面図・出土遺物

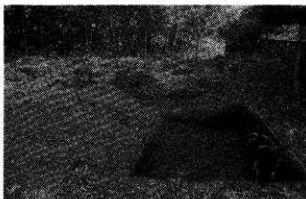
ンチの設定開始。16日火曜日、トレンチ設定完了。人力での掘削を開始。17日水曜日、重機による表土撤去作業開始。人力による掘削を行ったB2-1トレンチより石礫出土。18日木曜日、遺構検出作業開始。重機による表土除去作業終了。19日金曜日、遺構検出作業継続。土層の分析、実測等記録作業。22日月曜日、遺構検出作業終了。埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査の概要

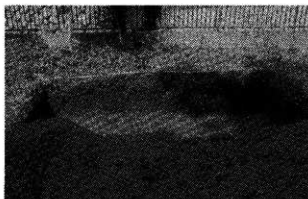
調査区の土層は、現地表面より60cmから70cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。その間は自然堆積の土層が観察されている。

発掘調査は、調査対象面積 1,062㎡に対して、トレンチ14か所、掘削面積112㎡、全体の10.55%の面積

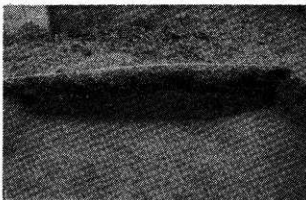
図版11 新東原遺跡m地点



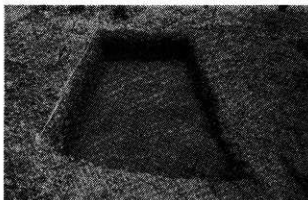
1. 調査区域全景



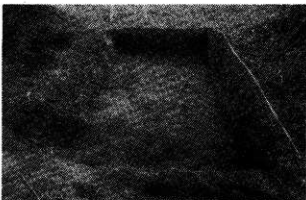
2. B2-1トレンチ上層



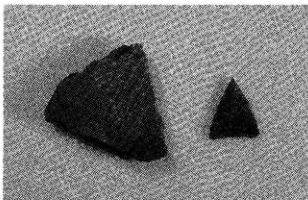
3. B4-1トレンチ土層



4. B2-1トレンチ遺構確認面検出状況



5. D2-1トレンチ遺構確認面検出状況



6. 出土遺物(1, 2)

の調査を行った。この調査の結果、遺構は検出されていない。出土遺物は縄文土器1点(1)、石鏃1点(2)のみであった。

調査のまとめ

発掘調査の結果、遺構の検出はなく、遺物はほとんど出土していない。本跡の性格を特徴付ける新たな成果は得られなかった。

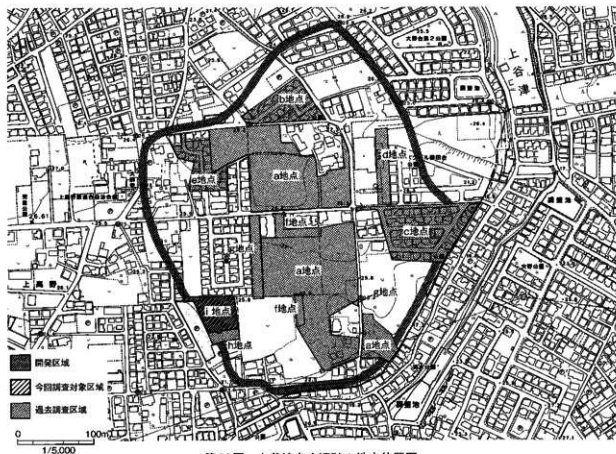
12. 上谷津台南遺跡 i 地点

遺跡の立地と概要

上谷津台南遺跡は、市城南東部、上高野地区に所在する。佐倉市との市境を流れる高野川の上流、上谷津の左岸、標高25m前後の下総上位面の白地上平坦面に立地する。遺跡の南端で上谷津から分岐する小さな谷津が南側から入り込み、地形的に遺跡を区分している。

本跡の規模は、東西方向約400m、南北方向約470mである。

本跡は過去8回調査が行われ、遺跡面積の1/3ほどに達する。これらの調査からわかってきた遺跡の内容は、縄文時代の早期・中期・後期の遺物が確認されており、磨製石斧や石鏃なども出土している。遺構としては、陥穴が2地点から4基検出されているが、建物跡、または、ファイアーピットなどの遺構は検出されていない。その他に、奈良・平安時代の土師器が散見されるが、明確な遺構は検出されていない。



第28図 上谷津台南遺跡 i 地点位置図

第8表 上谷津台南遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	調査地
a	3296/32209	確認 本調査	縄文時代 隆火2 時期不明 土坑2、溝1	縄文土器、磨製石斧、石鏃 奈良・平安時代 土師器	市教委	H7.12	市内H9
b	下層 361/361350 上層 28/361350	確認	なし	縄文土器 (加曾利式)	市教委	H9.3	市内H9
c	下層 936/6035 上層 144/6035	確認	なし	縄文土器 (早期中期後期)	市教委	H11.9	市内H12
d	221/1527	確認 本調査	縄文時代 隆火2	なし	市教委	H12.6	市内H13
e	342/2897	確認	なし	縄文土器 (後期)	市教委	H17.6	市内H18
f	70/665	確認	なし	縄文土器	市教委	H22.6	市内H23
g	163/167224	確認	なし	縄文土器	市教委	H23.5	市内H24
h	48/430	確認	なし	縄文土器・奈良平安時代 土師器	市教委	H25.5	市内H26

今回の調査区域 i 地点は、本跡の南西端に位置し、昨年度調査した h 地点の北側に隣接する。区域全体が標高25m前後の台地上に立地している。区域の西側には遺跡を区分した小さな谷津が入り込んでいる。今回開発区域とされた範囲の一部、南端部に突出した区域は、昨年度調査した h 地点に重複しており、今回の調査対象区域からは除外された。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、任意に10m方眼を組み、このグリッドを4分割した5m四方の小グリッド単位に2m×4mのトレンチを設定することを基本とした。ただし、区域西側に突出した進入路の部分には、別途、調査区の形状に合わせてトレンチを設定した。掘削は遺構確認面を人力により確認後、ローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年9月29日から10月9日まで行われた。9月29日月曜日、機材搬入、調査区の環境整備。30日火曜日から10月1日水曜日、環境整備のため下草刈り。杭打ち、トレンチの設定。2日木曜日、人力での掘削を開始。3日金曜日、重機による表土除去作業開始。遺構検出作業開始。7日火曜日、8日水曜日作業継続。土層分析、実測等記録作業実施。9日木曜日、重機により埋め戻し作業を行い、調査を完了した。

調査の概要

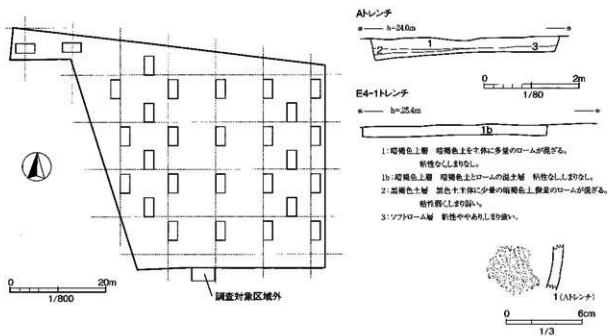
調査区は遺跡の西端に位置し、小さな谷津に面しているが、区域の大半は平坦面である。

調査区の土層は、現地表面より30cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。その間には、大半が耕作土の表土層で一部に自然の堆積がみられる。

発掘調査は、調査対象面積2,308㎡に対して、トレンチ28か所、掘削面積は224㎡、全体の9.70%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構は検出されていない。出土遺物は縄文土器の小片(1)が1点であった。

調査のまとめ

発掘調査の結果、遺構の検出はなく、遺物もほとんど出土していない。本跡の性格を特徴付ける新たな成果は得られなかった。

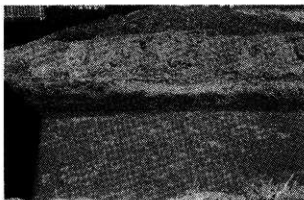


第29図 i 地点トレンチ配置図・土層断面図・出土遺物

図版12 上谷津台南遺跡 i 地点



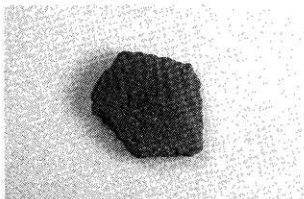
1. 調査区域全景



2. Aトレンチ土層



3. C4-1トレンチ遺構確認而検出状況



4. 出土遺物(1)

13. 麦丸宮前上遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

麦丸宮前上遺跡は、市域の中央部、麦丸地区に所在する。新川中流域で桑納川が左岸から合流する地点の南岸、標高22mから23mの下総下位面の台地上に立地する。本跡の規模は、東西方向約250m、南北方向約450mの比較的小規模で南北に細長い区域を範囲としている。昭和47年の「遺跡分布図」によれば、西側に隣接する麦丸遺跡(151)と同一の遺跡として認識されていた。昭和57年の包蔵地の調査により、広範囲な麦丸遺跡の中に小さな谷津が新川に向かって樹折されていたため、遺跡の分割が行われた。

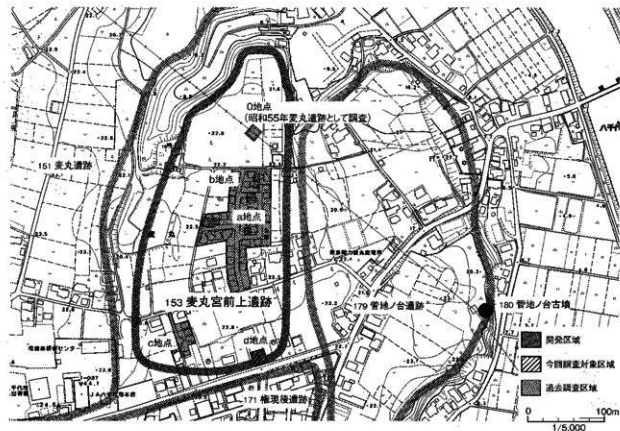
本跡区域内の調査は、過去4回行われている。本跡0地点(仮)では、調査面積が小さかったこともあり、遺構は確認されず、縄文土器と、砥石が出土するのみであった。これ以降、本跡北側地区の発掘調査が行われていないため、北側の遺跡内容は明らかとなっていない。a、b地点は本跡中央部に位置している。奈良・平安時代の竪穴建物が合計6軒ほど検出されている。少なくとも本跡中央部に、集落の存在が確認された。c地点は遺跡南部に位置し、遺構遺物の検出はなかった。

今回の調査区d地点は、本跡南端に位置する。道路をはさんで南側には権現後遺跡(171)が隣接する。

第9表 麦丸宮前上遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
0 (仮)	250	確認 本調査	なし	縄文土器、砥石	調査会	S55.9- S56.10	未報告
a	696/7,123.96	確認 本調査	奈良時代 竪穴建物 4	奈良時代 土師器、須恵器	市教委	H20.9	市内H21
b	91	本調査	なし	なし	市教委	H20.9	未報告
b	163/1,406.29	確認	奈良・平安時代 竪穴建物 2	奈良・平安時代 土師器	市教委	H23.6	市内H22
c	50/942.68	確認	なし	なし	市教委	H23.9	市内H22

※この地点の調査時、麦丸遺跡の範囲が麦丸宮前上遺跡の範囲を含んでいたため、麦丸遺跡として調査された。そのため、この地点を麦丸宮前上遺跡0地点と仮称する。



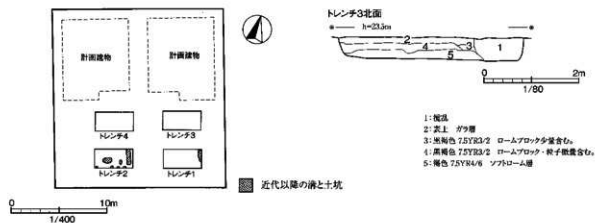
第30図 麦丸宮前上遺跡 d 地点位置図

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状と計画建物を考慮して、任意に2m×4mのトレンチを設定した。掘削は遺構確認面としたローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年11月17日から11月20日まで行われた。18日火曜日、杭打ち及びトレンチの設定、重機による表土剥ぎ実施。19日水曜日、遺構検出作業実施。土層分析、実測等記録作業。20日木曜日、埋め戻しを実施し、調査を完了した。

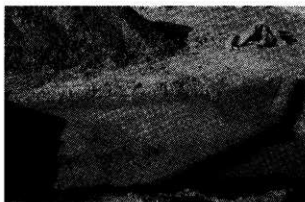


第31図 d地点トレンチ配置図・土層断面図

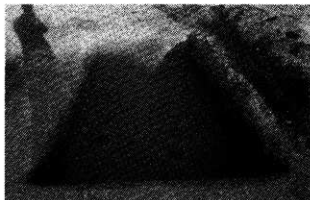
図版13 麦丸宮前上遺跡 d 地点



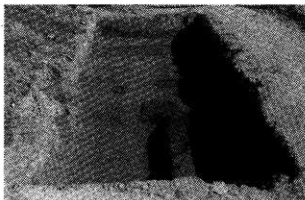
1. 調査区全景



2. トレンチ3東西土層



3. トレンチ4確認面検出状況



4. トレンチ2遺構検出状況

調査の概要

調査区はほぼ平坦な地形であった。現地表面より30cmほどで、遺構確認面としたソフトローム層が検出された。表土には、残土などが盛土されていたが、その下層から自然堆積土が確認されている。

発掘調査は、調査対象面積 331.01㎡に対して、トレンチ4か所、掘削面積は32㎡、全体の9.67%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、近代以降の所産と判断された溝と土坑が検出されたが、その他遺構の検出はなかった。また、遺物も近世以降の素焼きの土器が若干みられるのみであった。

調査のまとめ

発掘調査の結果、遺構とすべきものの検出はなく、遺物もほとんど出土していない。本跡の新たな成果は得られなかったが、細長い本跡の南部では、遺構・遺物の密度が希薄であるとする資料が追加できた。

14. 井戸向遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

井戸向遺跡は、市域中央部、萱田地区に所在する。

本跡は、新川中流域の左岸に開析された「須久茂谷津」と「寺谷津」にはさまれ、北東方向に向かって大きく細長くのびる舌状台地上に立地している。この台地には4つの遺跡が立地している。舌状台地の北東側の台地先端部には、南海道遺跡(182)が新川に面して立地する。また、舌状台地の北側には北海道遺跡(183)が須久茂谷津に面して立地する。台地の南西側の坊山遺跡(282)も須久茂谷津に面して立地している。そして、台地南側に本跡が、寺谷津に面して立地する。

この台地は、下総下位面と複数の千葉段丘面で形成されているが、南海道遺跡は千葉段丘面上に、北海道遺跡は下総下位面から千葉段丘面にかけて、坊山遺跡は下総下位面に、井戸向遺跡は下総下位面から千葉段丘面にかけて立地している。

本跡の規模は、北東-南西方向に約740m、北西-南東方向の最大幅で約420mである。

南海道遺跡を除く3遺跡の大半は萱田地区の区画整理事業に伴い、(財)千葉県文化財センターが昭和53年以降調査を行い、調査を完了している。しかし、本跡においては、区画整理事業から外れた北東側の一部分と現状のまま残された西側の一部分が未調査として残っていた。

本跡の概要としては、過去の調査成果から、旧石器時代から中世までの各時代、各時期に生活の痕跡を残している。中でも、奈良・平安時代の建物群が広範囲に点在している遺跡と考えられる。一方、a地点から縄文時代の陥穴や炉穴が検出されているが、この地点は、遺跡の立地から坊山遺跡を含めて理解するほうがしっくりするかもしれない。b地点にも縄文時代の陥穴が検出されている。

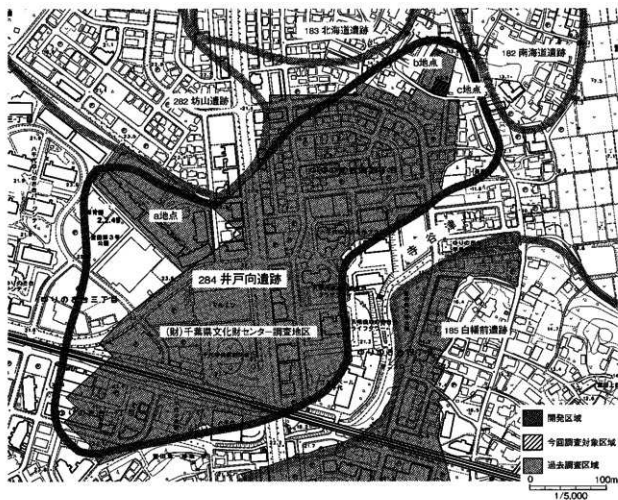
調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状と工事計画を考慮して、任意な位置に2m×4mのトレンチを設定した。掘削は遺構確認面であるローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

第10表 井戸向遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査期間	調査年月	報告書	
文化地区 調査地区	約20haの一部	確認	近江時代 遺跡集中地区9			S5311~		
	約22haの一部	確認	縄文時代 竪穴住居3			S54年度		
	約2.12ha	本調査	弥生時代後期 壘穴建物6	先上郡時代 石器等 弥生土器		S55年度		
	約3.6 ha	本調査	古墳時代前期 壘穴建物31、 古墳周溝溝3	古墳時代 土師器 奈良・平安時代	(財)千葉 県文化財 センター	S56年度	※1	
	約1.26ha	本調査	古墳時代後期 壘穴建物5	上知摩、須磨跡、赤石巻、墨書土 器多数		S57年度		
	約0.43ha	本調査	奈良・平安時代 壘穴建物104、 竪穴住居建物44、井戸跡10	縄文土器、奈良・平安時代		S58年度		
	約0.1 ha	本調査	中世 高塚、風下式墓			S59年度		
	約0.33ha	本調査				S60年度		
	978/13,570.46	確認	縄文時代 陥穴5、竪穴1 奈良・平安時代 土城7 埴原形跡1	縄文土器 奈良・平安時代 土師器		市教委 H178		市内田8
	142	本調査	縄文時代 陥穴1	縄文土器、奈良・平安時代 土師器		市教委 H179~ H17.10		未報告
164/1,563	確認	縄文時代 陥穴1	縄文土器、奈良・平安時代 土師器		市教委 H21.11	市内田22		

※1「八千代市井戸向遺跡」、「八千代市稲葉遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡」



第32図 井戸向遺跡c地点位置図

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成26年12月2日から12月4日まで行われた。2日火曜日、杭打ち及びトレンチの設定、重機による表土剥ぎ実施。遺構検出作業開始。3日水曜日、土層分析、実測等記録作業。4日木曜日、埋め戻しを実施し、調査を完了した。

調査の概要

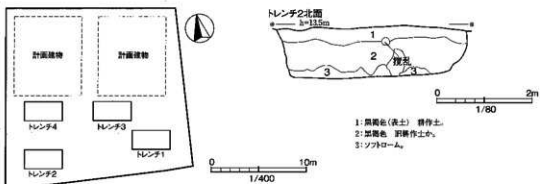
調査区は、遺跡の北東端に位置し、標高は14m前後である。道路を隔てて、南海道遺跡に近接する。調

査区の土層は、現地表面より90cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。その間には新旧の耕作土が表土を形成していた。

発掘調査は、調査対象面積 360㎡に対して、トレンチ4か所、掘削面積は32㎡、全体の8.89%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構は検出されていない。出土遺物は土師器の小片2点が出土する。

調査のまとめ

今回の調査区域 c 地点における発掘調査の結果、遺構の検出はなく、遺物もほとんど出土していない。本跡における新たな成果は得られなかったが、遺跡北東端の一端を明らかにできた。

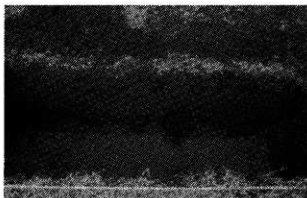


第33図 c地点トレンチ配置図・土層断面図

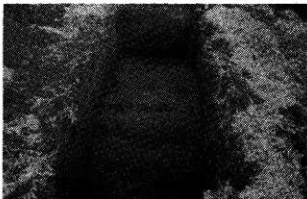
図版14 井戸向遺跡c地点



1. 調査区全景



2. トレンチ2東西土層



3. トレンチ3遺構確認面検出状況



4. トレンチ4遺構確認面検出状況

15. 高津館跡 e 地点

遺跡の立地と概要

高津館跡は、市域の南西部、高津地区に所在する。新川と勝田川の分岐点、大和田排水機場付近で左岸から合流する高津川(八千代1号幹線)の中流域の右岸の台地上に立地する。高津川は陸上自衛隊習志野駐屯地付近を水源にして、東から南東方向に流れを変え、その右岸から小谷谷津、宮間沢谷津、足太谷津の流れを集め新川に合流する。

本跡は高津川と宮間沢谷津との合流点の右岸、千葉段丘面上の標高17m付近の台地を中心に立地する。明確に館の範囲を確定することは難しいが、推定できる本跡の規模は、南北約200m、東西約200mである。

本跡の過去の調査は4地点あるが、調査記録があまりなく、館の姿を捉える十分な資料がない。昨年度調査したd地点でも、明確な館の痕跡を見出すにはいたらず、館跡として疑念が残っていた。

今回調査したe地点は、d地点に隣接しているが、土塁とみられる構造物が存在する区域を含んでいた。

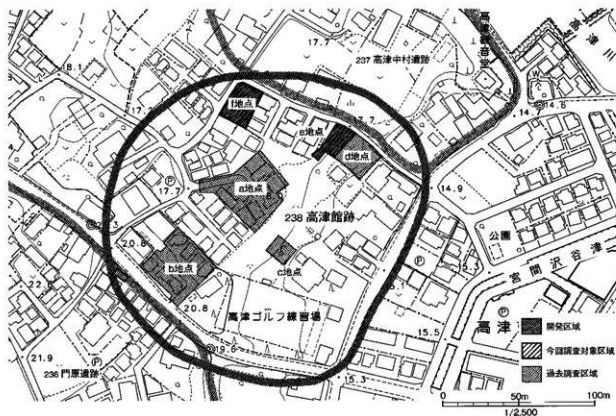
調査の方法と経過

発掘調査は、調査区域が不整形な形状であったため、任意ではあるが、土塁が想定される地面の起伏などの地形を考慮して2m×4mのトレンチを基本に設定した。掘削は遺構確認面を確認するため人力により

第11表 高津館跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査時期	土塁	堀	遺構	遺物	調査機関	調査年月	調査者
a	1,335.66	本調査	なし	なし	なし	なし	市教委	S56.1	※1
b	上層 136/1,207.72 下層 64/1,207.72	確認	なし	なし	なし	なし	市教委	H13.3	※2
c	39/336	確認	なし	なし	縄文土器(惣骨柄E式)	土師器	市教委	H13.4	市内H14
d	42/500	確認	なし	なし	近世銅器	なし	市教委	H25.9	市内H26

※1「八千代の歴史 資料編(地・古代・中世)」に記載はあるが不十分 ※2「高津館跡」地点・本館(遺跡) (不特定遺跡)



第34図 高津館跡 e 地点, f 地点位置図

行い、その後、遺構確認まで重機で表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、街区基準 補助点3B086 (X=-31322.935 Y=23214.374 H=17547補正済み)を基準に計測した。

調査は、平成27年1月13日から1月19日まで行われた。13日火曜日、トレンチの設定、人力での掘削開始。14日水曜日、竹の根のため手掘りが進まなかったが、平行して重機による表土除去作業開始。16日金曜日、土層分析、実測等記録作業。遺構検出作業。19日火曜日、遺構検出作業。2トレンチで溝の深さ確認のためサブトレンチ掘削。重機により埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査の概要

調査区は、遺跡の北側に位置し、ほぼ平坦な地形。隣接するd地点の調査区南東側は一部人為的な掘削もみられるが、自然地形としての段丘崖になる。

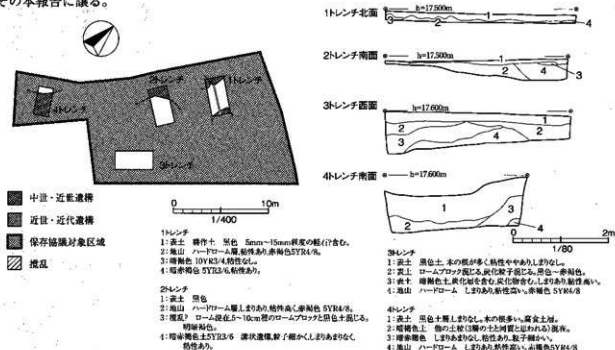
調査区の土層は、狭い範囲の中でも地点により様相が異なる。4トレンチでは1m掘削してようやく地山としてハードロームが検出されているのに対して、1トレンチでは10cmもなくハードロームに達した。

発掘調査は、調査対象面積 299.05㎡に対して、トレンチ4か所、掘削面積は28.5㎡、全体の9.53%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構としては中世の溝跡1条、同土坑3基が検出されている。出土遺物は検出されていない。溝の断面形状からも明らかに中世の堀と想定された。

調査のまとめ

この地点の調査の成果は、本跡にとって大きなものであった。正確な調査記録がなく、遺跡としての明確の根拠が乏しかった本跡は、宅地化の中で消え去ってしまう可能性があった。しかし、本地点で明確な痕跡が提示できたことは、大きな成果といえる。

この地点は、全域が記録保存の対象となり、本調査は平成26年度中に実施された。調査内容については、その本報告に譲る。

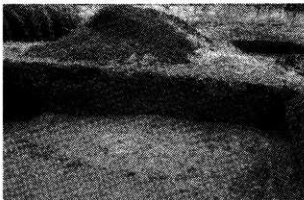


第35図 e地点トレンチ配置図・土層断面図

図版15 高津館跡 e 地点



1. 調査区全景



2. 3トレンチ西壁土層



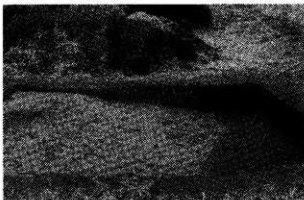
3. 1トレンチ遺構検出状況



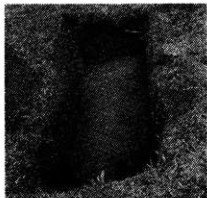
4. 1トレンチ北側土層



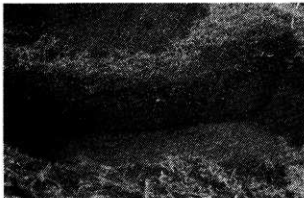
5. 2トレンチ遺構検出状況



6. 2トレンチ南壁土層



7. 4トレンチ掘削状況



8. 4トレンチ土層

16. 高津館跡 f 地点

遺跡の立地と概要

高津館跡 f 地点は、前項の d 地点から西北西に約50mの地点、遺跡範囲の北端に位置する。また、本地点は、標高17m前後の千葉段丘面上の平坦面に立地する。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区内に基準線を任意に設け、 $2\text{m} \times 4\text{m}$ のトレンチを全体に均等になるよう設定することとした。ただ、区域内にある障害物のため、掘削できなかった場所には、変則的なトレンチを設定した。

掘削は、遺構確認面であるローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出確認作業、土層の分析を行った。

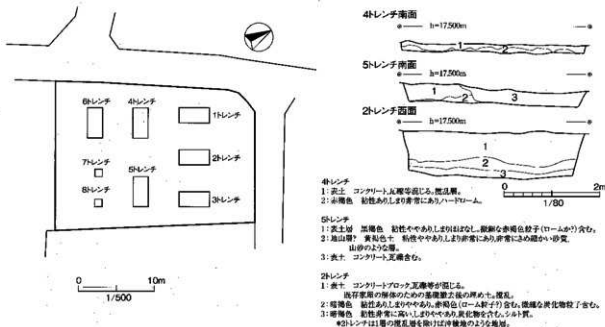
この調査での標高は、街区基準 補助点3B084 (X=-31291.611 Y=23142.2 H=16.967補正済み)を基準に計測した。

調査は、平成27年2月9日から2月13日まで行われた。9日曜日、トレンチの設定。10日火曜日、重機により表土除去作業。12日木曜日、遺構検出作業。土層分析、実測作業等記録作業を行う。13日金曜日、重機により埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査の概要

調査区の周辺一帯が旧村落の中にあり、また、調査区自体も宅地であったためか、大半が攪乱を受けていた。現地表面から10cmから1mほどでハードロームや黄褐色土などの地山と思われる面が検出されるが、それ以外は自然堆積土がみられず、ほとんどが攪乱であった。

発掘調査は、調査対象面積 478.91㎡に対して、トレンチ8か所、掘削面積は50㎡、全体の10.44%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。



第36図 f地点トレンチ配置図・土層断面図

調査のまとめ

この地点の調査の結果、調査区全体に攪乱が激しく、遺構遺物を検出できなかったものの、地表下10cmほどでハードロームが検出されている点は、台地一帯を削平し、平坦面を整形した可能性を考慮する必要がある。しかし、残念ながら今回の調査だけでは、証明はできない。今後、周辺において、館跡の全体像を明らかにできる調査が期待される。

図版16 高津館跡f地点



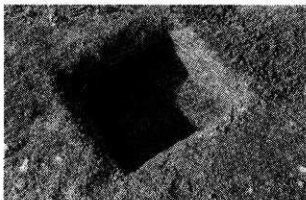
1. 調査区全景



2. 4トレンチ南壁土層



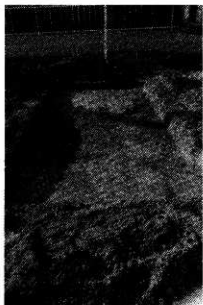
3. 5トレンチ南壁土層



4. 7トレンチ完掘状況



5. 4トレンチ完掘状況



6. 6トレンチ完掘状況

17. 高津新田野馬堀遺跡と地点

遺跡の立地と概要

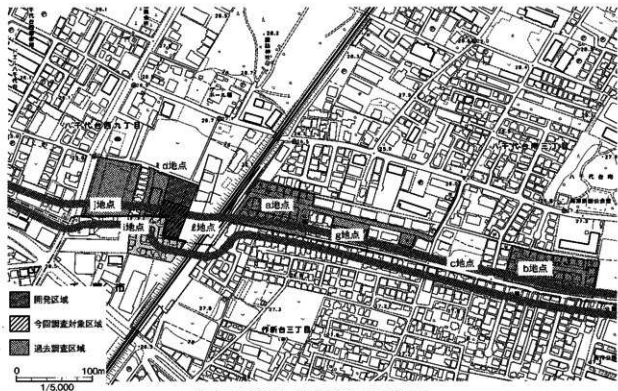
高津新田野馬堀遺跡は、市域の南西端、八千代台地区と高津地区の南端で、千葉市と習志野市の市域に所在する。この遺跡は、江戸時代に整備された小金牧の中の下野牧、その南東端の一部をさしている。また、高津新田は、八千代台地区の旧村名で住居表示が変更されたものである。

下野牧自体は、千葉市側・習志野市側にあり、本市にとっては本跡(市境)を境に牧の外側になる。旧村境や現市境がこの野馬堀を基準に境界としているようだ。この周辺は、市街化が進み、地上の遺跡としてはほとんどが現存していないが、古い記録や明治期に作成された迅速測図などから、高津川(八千代1号

第12表 高津新田野馬堀遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種類	遺跡	遺物	制作機関	調査年月	報告書
a	75/700	探査	北沢前新しい堀り込み1	土師器、タワラウカ	市教委	SSH1	未報告
b	163/1200	探査	池袋 野馬堀2	瓦片 陶磁器、磁石、銅面片	調査会	SH03	※1
c	※2 1,617.99	—	—	—	—	—	—
d	※3 90/300	探査	野馬堀3	なし	市教委	SH27	市内H12
e	※4 約60/1,054	探査	野馬上手・堀1	なし	市教委	H412	市内H4
f	489/4,297	本調査	野馬堀 遺跡 縄文時代早期 堀穴跡物1、土坑2	縄文土器(早期赤文土器) 有骨土師器、石鏃、フレイク	市教委	SH41	未報告
g	300/500	探査	野馬堀2、近代・近代十坑1	近代・近代 陶磁器	市教委	H101	※5
	15.40	本調査	—	—	—	—	—
h	690/4336	探査	高津新田野馬堀も地点として調査 野馬堀2、野馬上手 堀、溝1	近代・近代 陶磁器、銅面片、赤石、銅貨	市教委	H123	市内H12
i	158/739	本調査	野馬堀、野馬上手	—	調査会	H124~ H125	※6
j	36/208	探査	野馬堀1	近代・近代 陶磁器、泥団子	市教委	SH28	市内H13
k	22	本調査	—	—	—	—	—
l	196/1,080	探査	野馬堀1	近代・近代 陶磁器	市教委	SH28	市内H123
m	59/929	本調査	野馬堀2	近代・近代 陶磁器	市教委	SH28	本報告

※1 「千葉県八千代市高津新田野馬堀」 ※2 昭和62年10月、八千代台第三丁目建設53371.57㎡の調査に対し、「なし」の結果。その調査結果を付帯 ※3 d地点の調査に関する調査が不明のため取り消し。調査面積1,000㎡(公積) ※4 野馬上手を併用するために上半部分のみ調査 ※5 「不特定遺跡発掘調査報告書1」当が高津新田野馬堀遺跡は遺跡地帯となつたため、高津新田遺跡として調査。また、同報告書の本文中「e地点とする」との記載は誤りである。 ※6 「千葉県八千代市高津新田野馬堀遺跡」地点



第37図 高津新田野馬堀遺跡と地点位置図

幹線の支流、足太川(足・葦太谷津・足太雨水1号幹線)の上流と高津川のより上流で分岐する宮間沢谷津の上流とを結ぶものとみられる。本跡の規模は、東西方向で約1,100mほどと推定される。

本跡は、過去10地点で調査が行われている。開発区域による調査区の制限もあるが、1条から3条の大小の溝や堀がそれぞれ確認されている。これらの溝や堀の方向性は前述のとおり、市境に沿って掘られていることが判明している。ただ、主となる堀が1条か2条かは明確ではない。あるいは部分的に2条になっているのかもしれない。馬を除けるための土手も、昭和60年代前半まで一部では残存していたが、現在はまったく残存していない。また、すでに市街地になった区域では、推定されるに過ぎない。

今回の調査区と地点は、本跡中央付近の市境が凸出する極めて特異な場所である。そのため、基準となつたであろう野馬土手がどのように造られていたか、また、どうして野馬土手を凹まざるを得なかったかが本跡本地点にとっての課題といえる。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、調査区南端の境界線を基準線として、10m方眼を設定した。この方眼と野馬堀の方向に合わせて、任意の位置にトレンチを設定した。掘削は包含層確認のために人力による掘削調査と遺構確認面としたローム上面まで重機により表土の除去を同時並行で実施した。掘削後、遺構の検出確認作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成27年1月20日から1月26日まで行われた。20日火曜日、機材搬入、調査区、トレンチの設定を行った。21日水曜日、人力による調査、重機による表土撤去作業を開始。遺構検出作業開始。22日木曜日、雨のため重機による作業のみ実施。23日金曜日、遺構検出作業継続。土層分析作業、実測等記録作業実施。26日土曜日、土層等記録作業完了。埋め戻しを実施し、調査を完了した。

調査の概要

調査区周辺は、足太谷津が東側からこの付近にまで入り込んでいると考えられるが、谷津尻を想定させる土地形状はみられず、現状では、ほぼ平坦な地形である。

調査区の土層は、市境付近で、現地表面より40cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出され、地表からその間は耕作土とされた表土層のみであった。一方、Cトレンチでは東側に向うにしたがって約1m20cmほどの深さまでローム面が傾斜し、自然堆積土が次第に厚くなることが判明した。

発掘調査は、調査対象面積1,382㎡に対して、トレンチ6か所、掘削面積は144㎡、全体の10.42%の面積を掘削し調査した。この調査の結果、遺構は近世の堀及び溝が3条検出され、出土遺物は近世の陶磁器の小破片が多数表面採集等で回収されている。

調査のまとめ

本跡と地点の調査の結果、当初の予想通り、市境と同じラインに沿って、野馬堀も屈曲していることがあらためて確認できた。また、同時に、屈曲する部分には、足太谷津の末端、谷津尻が迫っていることもわかってきた。これらの成果は、本跡の解明に有用な資料となろう。この調査結果、確認調査の対象範囲である1,382㎡全域について、保存協議の対象となった。本調査は平成26年度中に行われている。

18. 高津梅屋敷遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

高津梅屋敷遺跡は、市域の西部、大和田新田地区に所在する。高津川の左流城、左岸の舌状台地上に立地する。高津川に面するこの台地は、東西両側を小谷津により開析され、南東方向に突出する。本跡の規模は北西-南東方向に約470m、北東-南西方向に約300mである。

本跡は、過去3回調査が行われている。3回とも明確な遺構の検出は確認されていない。出土遺物も縄文土器、土師器が若干検出されているのみである。そのため、本跡の実態は不明のままである。ただ、台地先端部に公園が存在しており、いまだ、遺跡の主体部は残存している可能性がある。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区北側の境界線を基準に10m方眼を組み、この方眼ラインに沿って、トレンチを設定した。掘削は、遺構確認面としたローム上面まで重機により表土を除去した。掘削後、遺構の検出確認作業、土層の分析を行った。

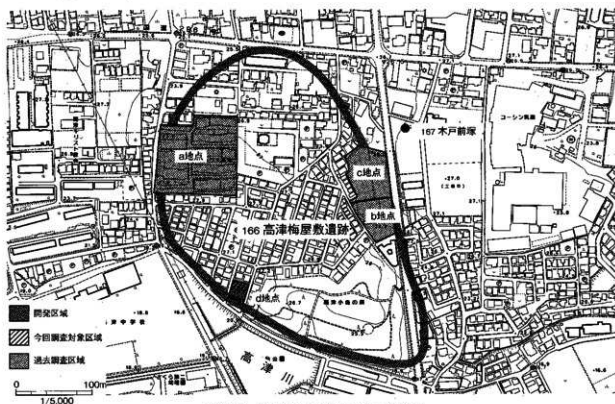
この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成27年1月28日から2月2日まで行われた。28日水曜日、トレンチ設定、重機による表土除去。遺構検出作業。29日水曜日、土層実測等記録。2月2日月曜日、埋め戻しを行い、調査を完了した。

第13表 高津梅屋敷遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	1,606/7,000	確認	時期不明 土坑 1	縄文土器	調査会	S53.7	※ 1
b	104/2,244.52	確認	なし	なし	市教委	H15.2	市内H15
c	154/2,800	確認	なし	奈良平安時代 土師器	市教委	H23.12	

※ 1 「八千代市 梅屋敷遺跡」



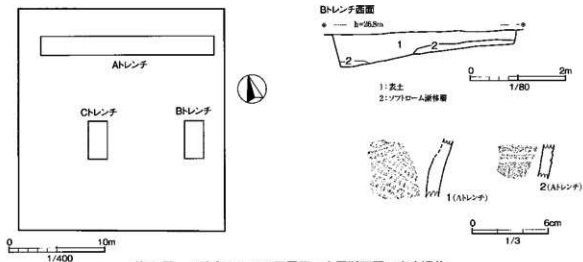
第39図 高津梅屋敷遺跡 d 地点位置図

調査の概要

調査区は、高津川に面する遺跡の南西端に立地し、南側にわずかに傾斜する地形である。

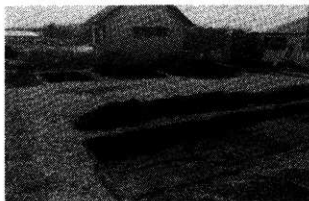
調査区の土層は、現地表面より20cmから60cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。その間は表土層のみである。

発掘調査は、調査対象面積 509㎡に対して、トレンチ3か所、掘削面積は52㎡、全体の10.22%の面積を調査した。この調査の結果、遺構は検出されていない。出土遺物は縄文土器2点、石片1点が出土した。

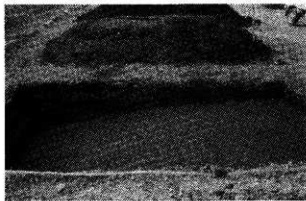


第40図 d地点トレンチ配置図・土層断面図・出土遺物

図版18 高津梅屋敷遺跡d地点



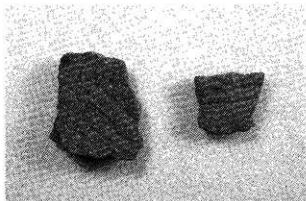
1. 調査区域全景



2. Bトレンチ遺構検出状況



3. Aトレンチ遺構確認面検出状況



4. 出土遺物(1, 2)

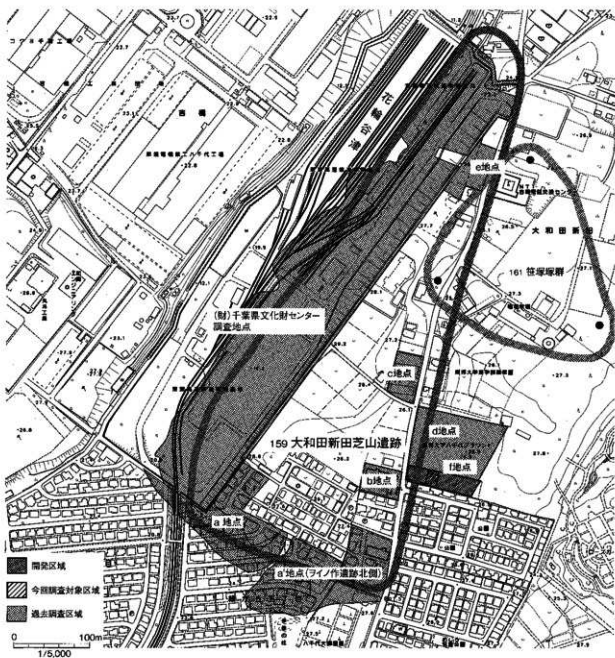
調査のまとめ

今回の調査区d地点の調査の結果、遺構は検出されず、縄文土器がわずかに検出されたのみであった。以前の調査と同様、本跡の内容に対する成果はなかった。隣接する公園に遺跡本体が遺存されていることが期待される。

19. 大和田新田芝山遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

大和田新田芝山遺跡は、市域の西部、大和田新田地区に所在する。桑納川の右岸から合流する花輪谷津を約2,000m南下し(廻り)、谷津の中流域の右岸、台地上に広く展開する。段丘面としては、下総上位面



第41図 大和田新田芝山遺跡 f 地点位置図

第14表 大和田新田芝山遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
文七 調査地区	67,200	本調査	縄文時代 炭灰ブロック 2	旧石器時代 ナイフ形石器他 縄文土器 (早期-後期) 平安時代 土師器、刀子	(財)千葉 県文化財 センター	559年度	※1
			縄文時代 早期付穴 2 同 前期付穴遺物 1土坑 1 同 中期付穴遺物 1 後期付穴遺物 1土坑 1 平安時代 形穴建物5棟跡跡 1 時期不明 形穴建物4			559~ 562年度	
a	762/7,630	確認	縄文時代早期付穴1、 前期 形穴建物1、縄文時代 土坑9 平安時代 形穴建物1土坑1	縄文土器 早期 (赤褐色) 後期中期 (白磁) 平安時代 灰褐色	調査会	561.10	※2
	3,500	本調査				562.5~ 562.6	
a'	—	確認・本	縄文時代 後期付穴建物1土坑1	縄文土器 前期、後期	調査会	—	
b	上 321.5/1947.71 下 24/1947.71	確認	なし	縄文土器	市教委	H15.2	市内H15
c	216.2/114.90	確認	なし	縄文土器、五神 陶磁器	市教委	H18.4	市内H19
d	376/4,000	確認	奈良・平安時代 土坑1	縄文土器、石器	市教委	H23.4	市内H24
e	上 259/2515.50 下 20/2515.50	確認	縄文時代 土坑1	縄文土器	市教委	H23.9	市内H24

※1 1千4百年代中葉ノ台跡跡・芝山遺跡 176集。 ※2 「1重原8千年代中葉ノ台跡跡・ツノ作遺跡他発掘調査報告書」。f 地点は調査時「ツノ作遺跡他発掘地点」として調査が行われた。遺構・調査時期等について不明な点もあるが、報告書等から抽出した。

に区分され、標高27mから29mに立地する。

本跡の規模は大きく、南西-北東方向で約750m、北西-南東方向の最大幅約300mの範囲を想定している。花輪谷津に面する台地先端部の大半は、(財)千葉県文化財センターにより調査が行われている。その後、周辺の開発に伴い6地点で調査を行っている。遺跡全体の密度は低いが、旧石器時代から奈良・平安時代まで断続的に集落や人の生活の痕跡が検出されている。傾向としては、台地先端部から離れるにしたがって、遺構・遺物の検出はみられなくなる。a地点は、昭和58年の遺跡分布図作成の時点で本跡の区域として捉えられていたが、a'地点はツノ作遺跡の北側として捉えられていた。周辺で行われた区画整理の調査時において、ヨイノ作遺跡本体とa'地点の間に大きな谷津が入り込むことが確認されており、平成9年の分布図の改正時において、分離統合が行われ、現在のようになっている。

今回の調査区f地点は、花輪谷津側の台地先端から約300m台地奥に入り、本跡東端に位置する。

調査の方法と経過

発掘調査は、隣接するd地点と同一事業者が、同一目的で行っているため、一部重複して事業が計画された。調査は重複する部分を除き、区域の形状に合わせて、任意に2m×4mのトレンチを基本に設定した。掘削は人力により、遺構確認面としたローム上面まで行った。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を行った。

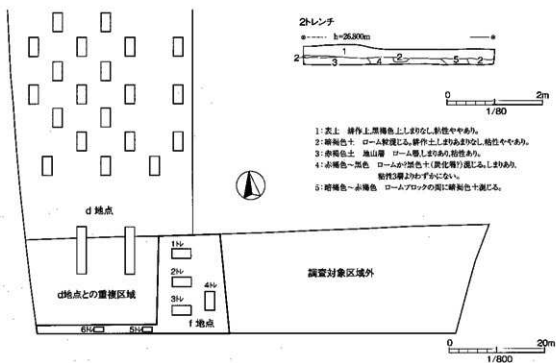
この調査での標高は、調査区近隣の街区三角点1005A (X=-29700.988 Y=22617.26 H=26.682m補正前)を基準に計測した。

調査は、平成27年2月3日から2月9日まで行われた。3日火曜日、トレンチの設定、人力での掘削を開始。4日水曜日、トレンチ掘削継続。土層分析、実測等記録作業開始。遺構検出作業。6日金曜日、記録作業完了。埋め戻し開始。9日水曜日、埋め戻しが終了し、調査を完了した。

調査の概要

調査区の土層は、現地表面より20cmほどで遺構確認面としたローム層が検出された。表土層は耕作上のみで、すでに周辺一帯で削平が行われていたとみられた。

発掘調査は、調査対象面積 320㎡に対して、トレンチ 6 か所、掘削面積は 36㎡、全体の 11.25%の面積を掘削し調査した。調査の結果、遺構・遺物の検出はなかった。

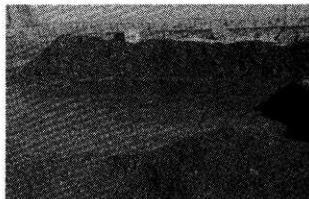


第42図 f地点トレンチ配置図・土層断面図

図版19 大和田新田芝山遺跡 f地点



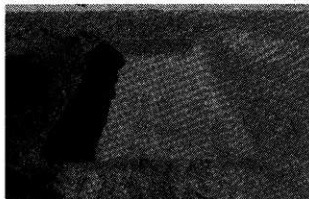
1. 調査風景



2. 1トレンチ土層



3. 2トレンチ土層



4. 2トレンチ遺構確認面検出状況

調査のまとめ

今回の調査区 f 地点は、本跡の東端でもあり、遺跡の範囲を見極める調査でもあったが、調査の結果、遺構・遺物は検出されず、遺跡範囲の確定に有用な資料が得られた。

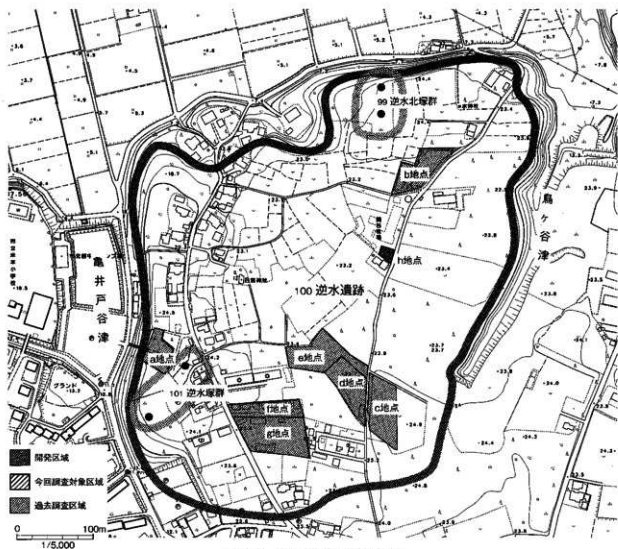
20. 逆水遺跡 h 地点

遺跡の立地と概要

逆水遺跡は、市の北東部、米本地区に所在する。新川の上流域、右岸の台地上に立地する。北面するこの舌状台地は、西側を亀井戸谷津、東側を鳥ヶ谷津が開析している。台地の標高は23m前後の下総下位面により形成され、全体にほぼ平坦な地形である。北端の一部に千葉段丘面がみられるが狭い。

本跡は、遺跡の分離統合により、台地全体をひとつの遺跡として認識された。本跡の規模は、北東-南西方向約700m、北西-南東方向約500mである。本跡の中には、北端部と南西端部の台地の縁にそれぞれ小規模な塚群が確認されている。

本跡の調査は、過去7回行われている。本跡の北部で調査が行われた b 地点では、弥生時代中期の方形



第43図 逆水遺跡 h 地点位置図

第15表 逆水遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種類	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	146/1,340	確認	弥生時代後期 竪穴建物4 土坑1	縄文土器 前期～後期 弥生土器 前期 平安時代 土器類 水巻罐瓦	市教委	E28.1	市内H7
	上層 下層	678 20/678	水調査	中世 土堀墓17		調査会	E28.4
b	304/2,414	確認	弥生時代中期 方形周溝墓2 時期不明 溝1	縄文土器 弥生土器 古墳時代 土師器	市教委	E28.11 E28.11～ E28.12	市内H8 未報告
	1層 下層	340 4/340	本調査				
c	250/2,919	確認	弥生時代後期 竪穴建物1	弥生土器 前期	市教委	E28.3	市内H14
d	458/2,645	確認	弥生時代後期 竪穴建物2	縄文土器、弥生土器 後期	市教委	E28.5	市内H15
e	377/3,012	確認	縄文時代(中期～後期) 土坑10 弥生時代後期 竪穴建物1	縄文土器(中～後期) 弥生土器(後期)	市教委	E27.7	市内H18
f	248/1,874.62	確認	なし	弥生土器(後期)、夏水罐瓦	市教委	E27.10	※1
g	430/4,256	確認	縄文時代 竪穴建物1、第21 非世土坑2	縄文土器 中期	市教委	E22.11	市内E23

※a地点は遺跡統合以前の遺跡名「逆水西遺跡」として調査を実施 ※1「不特定遺跡発掘調査報告書V」

周溝墓群が検出されている。また、南半部で行われた6ヶ所の調査では、弥生時代後期の竪穴建物群が広範囲に確認されている。

そして、今回の調査区h地点は、遺跡の中央部の平坦面に立地している。北部と南半部の中間点に位置する。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、また、計画建物を避けて、任意にトレンチを設定した。

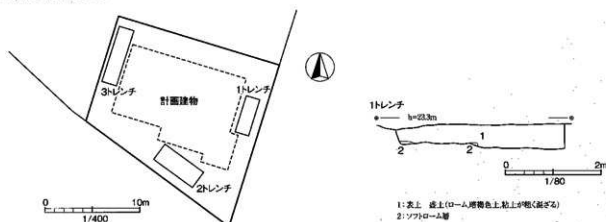
掘削は人力により、遺構確認面としたローム上面まで表土を除去した。掘削後、遺構の検出確認作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成27年2月13日から2月19日まで実施した。13日金曜日、トレンチの設定、人力での掘削を開始。16日月曜日、3トレンチの掘削、遺構検出作業完了、土層分析、実測等により記録作業。17日火曜日、埋め戻し開始。19日木曜日、埋め戻しが終了し、調査を完了した。

調査の概要

発掘調査は、調査対象面積 258.91㎡に対して、トレンチ3か所、掘削面積は25㎡、全体の9.66%の面積を掘削し調査した。



第44図 h地点トレンチ配置図・土層断面図

調査区の土層は、現地表面より40cm～50cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が一部で検出された。

この調査の結果、遺構・遺物が検出されなかった。

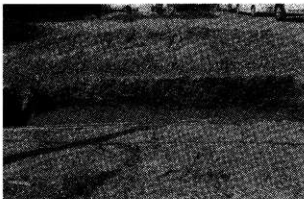
調査のまとめ

今回の本跡調査区 h 地点は、本跡の中央部分に位置し、本跡の南北両端で遺跡の性格を異にすることに対する資料が提供されることが期待されたが、調査面積の小さいこともあり、遺構・遺物を検出することができなかった。今後の資料の集積が期待される。

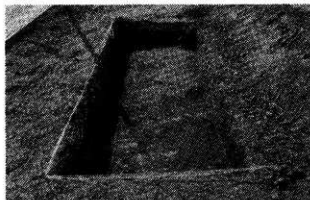
図版20 逆水遺跡 h 地点



1. 調査区域全景



2. 1トレンチ土層



3. 1トレンチ掘削状況



4. 2トレンチ掘削状況



5. 3トレンチ掘削状況

21. 池の台遺跡 h 地点

遺跡の立地と概要

池の台遺跡は、市域の南部、萱田地区に所在する。新川中流域の左岸に開析された池の谷津の奥に立地する。池の谷津は、上流域で南北の二つの小谷津が合流している。本跡は、この南北二つの谷津により開析された標高23mほどの下総下位面で形成された舌状台地上に立地する。

本跡の規模は小規模な舌状台地全体の東西方向に約230m、南北方向に約150mほどである。

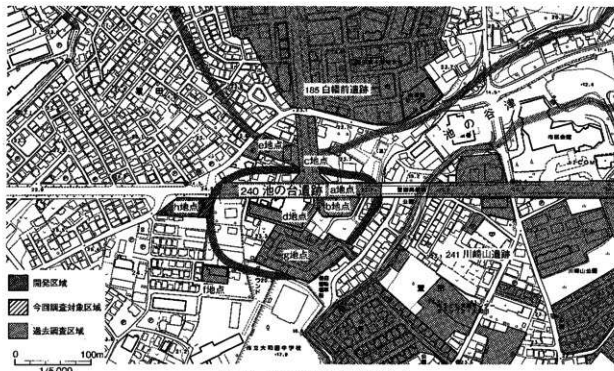
本跡の周辺は、市街地化が進み、ほとんど遺跡が遺存する余地がなくなっている。池の谷津が北側に分岐する小谷津の北側一帯には白幡前遺跡(185)が大規模に展開する。また、南側に分岐する谷津の対岸の台地には川崎山遺跡(241)が広がっている。いずれも弥生時代から奈良・平安時代の集落が検出されている。

本跡の調査は7地点で行われている。遺跡範囲の大半で調査が行われており、平安時代の堅穴建物や据

第16表 池の台遺跡の調査

地点	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
a	4,000	確認 本調査	平安時代 堅穴建物 6, 竪穴柱建物 1, 空堀状遺構 1 時期不明 土坑 38, 溝 1	昭和初期代 石器 縄文時代 石器 平安時代 土師器, 灰土器	調査会	SS48~ SS410	※ 1
b	上層 700 下層 8,700	確認 本調査	縄文時代 燧石 1 平安時代 堅穴建物 1 時期不明 土坑 1	縄文土器 (河上台北塚), 石鏡, 煎石, 磨石 平安時代 土師器	市教委	SS711~ SS712	未報告
c	2,500	確認 本調査	池の台遺跡 海澄不明 溝 1 白幡前遺跡 平安時代 堅穴建物 2 時期不明 溝 2	平安時代 土師器, 煎茶器	市教委	SS65~ SS68	※ 2
d	184/1,797.18	確認 本調査	縄文時代 竪穴 1 平安時代 堅穴建物 2	縄文土器, 石鏡 平安時代 土師器	市教委	H9.5	市内H9
e	288 8,288	確認 本調査	奈良・平安時代 土坑 2 時期不明 溝 2	奈良平安時代 土師器, 煎茶器	市教委	H15.4	市内H16
f	147/708 4,708	確認 なし	なし	縄文土器, 土師器	市教委	H16.2	市内H16
g	248/1,127.89	確認 本調査	縄文時代 竪穴 1	奈良・平安時代 土師器, 煎茶器	市教委	H21.5	市内H22
h	20	本調査	なし	なし	市教委	H21.8	※ 3

※ 1 [池ノ台遺跡] ※ 2 [下流部八千代市域の台遺跡] ※ 3 [千歳町八千代市域の台遺跡] ※ 地点別調査報告書



第45図 池の台遺跡 h 地点位置図

立柱建物が検出されている。今回の調査区域 h 地点は、本跡の範囲と推定されている西端に位置する。

調査の方法と経過

発掘調査は、開発区域の東端の一部を調査対象区域として行われた。調査対象区域の形状に合わせて、任意に2m幅のトレンチを1ヶ所設定した。掘削は人力により、遺構確認面であるローム上面まで表土を除去した。掘削後、遺構の検出確認作業、土層の分析を行った。

この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成27年3月3日から3月6日まで行われた。3日火曜日、機材搬入、トレンチの設定、人力での掘削を開始。4日水曜日、トレンチ掘削、遺構検出作業、土層分析、写真等記録作業。5日木曜日、土層実測。検出遺構に確認のためサブトレンチ掘削。断面台形状の近現代の溝であることを確認。6日金曜日、埋め戻しを行い、調査を完了した。

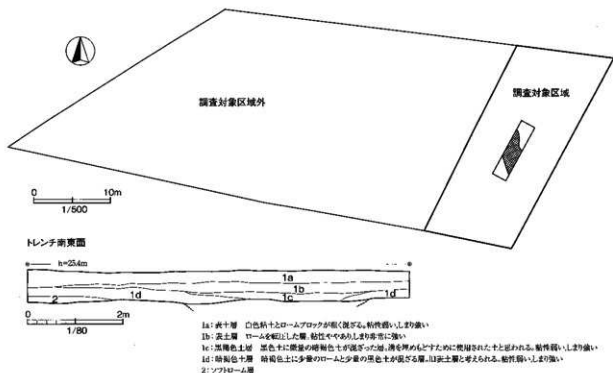
調査の概要

発掘調査は、調査対象面積188m²に対して、トレンチ1ヶ所、掘削面積は16m²、全体の8.51%の面積を掘削し調査した。調査区の土層は、現地表面より70cmほどで遺構確認面としたソフトローム層が検出された。その間には、地表面に40cmほど盛土されていたが、旧表土も確認されている。

この調査の結果、遺構・遺物の検出はみられなかった。

調査のまとめ

本跡 h 地点の調査の結果、遺構・遺物を検出することができなかった。それでも、本跡の規模などを理解するためのひとつの資料を得ることができたといえる。

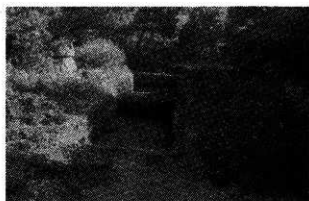


第46図 h地点トレンチ配置図・土層断面図

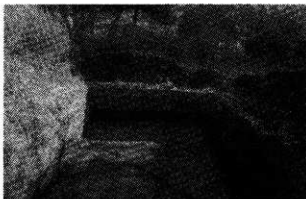
図版21 池の台遺跡h地点



1. 調査区域全景



2. トレンチ掘削状況



3. トレンチ遺構検出状況



4. トレンチ土層

22. 烏田込の内遺跡c地点

遺跡の立地と概要

烏田込の内遺跡は、市域の北部、烏田地区に所在する。新川下流域の左岸、北側を「葛藩谷津」、南側を小規模な谷津に区切られた舌状台地全体を遺跡範囲としている。この台地は、標高21m～22mの下総下位面の河岸段丘により形成されている。平成9年の遺跡の分離統合により、国道16号線により南北で区分されていた2つの遺跡をひとつに統合している。

本跡の規模は、北西-南東方向約630m、北東-南西方向約420mである。

本跡の調査は、近年頻繁に行われている。県道バイパスの建設工事で調査が行われると周辺地区の調査が相次いだ。4地点の調査により、弥生時代後期から奈良・平安時代に至る各時期の集落の一端が検出されてきた。確認調査のみの区域もあり、正確に把握することはできないが、この舌状台地の北半には密度の濃い奈良・平安時代の集落の展開が想定される。本跡南半区域は現状で不明である。

今回の調査区c地点は遺跡中央部に位置し、標高約21m～22mの平坦面に立地する。

調査の方法と経過

発掘調査は、調査区の形状に合わせて、計画されている建物を避けて、任意にトレンチを設定した。掘削は人力により遺構確認面としたローム上面まで表土を除去した。掘削後、遺構の検出作業、土層の分析を

行った。

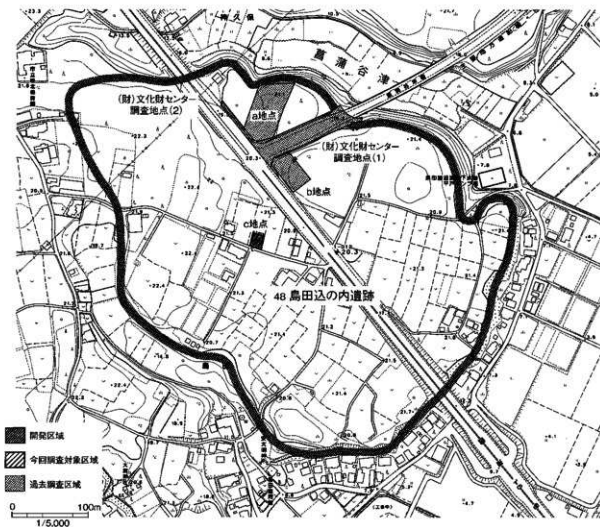
この調査での標高は、調査区近隣で都市計画図上の標高の明らかな地点を基準に計測した。

調査は、平成27年3月17日から3月20日まで行われた。17日火曜日、境界杭を基準にトレンチを設定。

第17表 島田込の内遺跡の調査

発見	調査面積 (㎡)	調査種別	遺構	遺物	調査機関	調査年月	報告書
文七 調査地区 (1)	上層 405/4000	確認 本調査	古墳時代 墓穴遺跡12	石器時代 石器、陶文土器	(財)千葉 県文化財 センター	H5.10~ 196.1	#1
	下層 160/4000		奈良・平安時代 墓穴建物9、 竪立柱建物4	奈良平安時代 土師器、灰土器、灰土器片			
a	1995/240	1次確認	弥生時代後期~古墳時代前期 墓穴建物1	縄文土器、奈良土器 古墳時代 土師器	市教委	H15.6	市内H16
	170/170	2次確認	奈良・平安時代 竪穴建物6、土坑4	縄文土器、弥生土器 古墳時代 土師器			
			縄文時代 土坑2 奈良・平安時代 竪穴建物3 竪立柱建物2、土坑1 近接以降 灰土器1	縄文土器、弥生土器 古墳時代 土師器 奈良・平安時代 土師器、灰土器			
184	本調査	奈良・平安時代 竪穴建物4、土坑1	縄文土器、奈良土器 古墳時代 土師器 奈良平安時代 土師器、灰土器	市教委	H13.7~ H15.8	市内H16	
文七 調査地区 (2)	上層 200/200	確認 本調査	古墳時代 墓穴遺跡12	石器時代 石器、陶文土器	(財)千葉 県文化財 センター	H15.10~ H16.11	#1
	下層 10/200		奈良・平安時代 墓穴建物1	奈良平安時代 土師器、灰土器			
b	206/2168.71	確認	弥生時代~平安時代 墓穴建物13、土坑48	縄文土器、奈良土器、 古墳時代 土師器 平安時代 土師器、灰土器	市教委	H18.9	市内H19

#1「新橋内河原縄文文化財調査報告書」第229集、#2「新橋河原縄文文化財調査報告書」第250集



第47図 島田込の内遺跡c地点位置図

人力での掘削を開始。18日水曜日、掘削継続、非常に硬い土層のため難航するが、ほぼ掘削を完了。19日木曜日、遺構検出作業。土層分析、実測等記録作業実施。20日金曜日、埋め戻しを行い、調査を完了する。

調査の概要

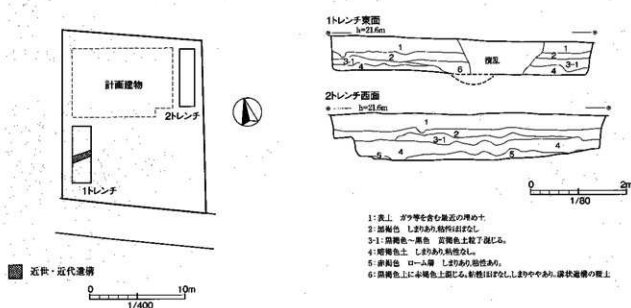
発掘調査は、調査対象面積 264.96㎡に対して、トレンチ 2か所、掘削面積は21㎡、全体の7.93%の面積を掘削し調査した。

調査区の上層は、現地表面より60cmほどで遺構確認面としたローム層が検出された。最上層には30cmから40cmの盛土層が検出されている。以下、旧表土層と自然堆積土が検出される。

この調査の結果、遺構は検出されていない。出土遺物は縄文土器12点、その内には前期の繊維土器(1)が出土する。奈良・平安時代の土師器(2.3)が29点、須恵器(4.5)7点、陶磁器3点が出土した。

調査のまとめ

本跡c地点の調査の結果、遺構を検出することができなかった。今回の調査では、調査規模が狭かったこともあるが、台地中央部であることも関係しているかもしれない。一方、出土遺物では、本跡の多様な時代の痕跡を示す資料を得ることができた。



第48図 c地点トレンチ配置図・土層断面図

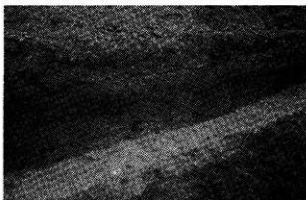


第49図 鳥田込の内遺跡c地点出土遺物

図版22 島田込の内遺跡c地点



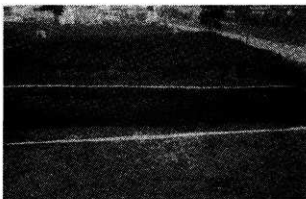
1. 調査区域全景



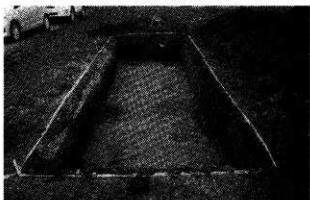
2. 1トレンチ西壁土層



3. 1トレンチ遺構確認面検出状況



4. 2トレンチ東壁土層



5. 2トレンチ遺構確認面検出状況



6. 2トレンチ北壁土層



7. 出土遺物(1~5)

美丸宮前上道跡 e地点	大和田新田字米本通南 631-18,22,23,24	12221	153	35度 44分 26秒	140度 6分 25秒	平成26年11月17日 ～ 平成26年11月20日	上層 32/331.01	宅地造成
井戸向道跡 c地点	豊田字木戸裏(南)1161-3	12221	284	35度 43分 53秒	140度 6分 25秒	平成26年12月2日 ～ 平成26年12月4日	上層 32/360	住宅建設
高津館跡 c地点	高津字部田1329-1	12221	238	35度 43分 2秒	140度 5分 23秒	平成27年1月13日 ～ 平成27年1月19日	上層 28.5/299.05	住宅建設
高津館跡 f地点	高津字中村552-1の一部	12221	238	35度 43分 3秒	140度 5分 21秒	平成27年2月9日 ～ 平成27年2月13日	上層 50/478.91	集合住宅建設
高津新田野鳥居道跡 f地点	八千代西9丁目419	12221	251	35度 41分 43秒	140度 4分 58秒	平成27年1月20日 ～ 平成27年1月26日	上層 144/1,382	宅地造成
高津梅原敷道跡 d地点	大和田新田山101-92	12221	166	35度 43分 16秒	140度 4分 55秒	平成27年1月28日 ～ 平成27年2月2日	上層 52/509	宅地造成
大和田新田芝山道跡 f地点	大和田新田字長共南野 769-1-2, 768-10の各一部	12221	159	35度 43分 56秒	140度 5分 2秒	平成27年2月3日 ～ 平成27年2月9日	上層 36/320	駐車場・ 物置建設
速水道跡 h地点	米本字速水1229,1230-1の 各一部	12221	100	35度 45分 44秒	140度 7分 3秒	平成27年2月13日 ～ 平成27年2月19日	上層 25/258.91	個人住宅建設
池の台道跡 h地点	豊山町660-3の一部	12221	240	35度 43分 25秒	140度 6分 13秒	平成27年3月3日 ～ 平成27年3月6日	上層 16/188	店舗建設
高田込の内道跡 c地点	扇田字込之内995-5	12221	48	35度 45分 51秒	140度 6分 6秒	平成27年3月17日 ～ 平成27年3月20日	上層 21/261.96	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白幡前道跡 e地点	包蔵地 集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代、中世	奈良・平安時代 上坑3基 中世 土坑38基、溝跡3条 近世 上坑1基、溝跡1条	中世～近世 陶磁器、土器	
川崎山道跡 l地点	包蔵地 集落跡	縄文時代 弥生時代、古墳時代 奈良・平安時代	なし	縄文土器 古墳時代 土師器	
向山道跡 i地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 奈良・平安時代	なし	旧石器時代石器	
殿内道跡 d地点	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代	縄文時代 竪穴建物1軒、 土坑2基	古墳時代 竪穴建物1軒、 奈良・平安時代 竪穴建物1軒、 土坑2基	古墳時代 土師器 奈良平安時代 土師器、須恵器	
真木野前道跡 a地点	包蔵地	古墳時代 奈良・平安時代	近現代 土坑1基	奈良平安時代 土師器 近世 銭貨	
真木野道跡 b地点	包蔵地	古墳時代 奈良・平安時代	奈良・平安時代 竪穴建物2軒、 土坑2基	縄文土器、石器 奈良・平安時代 土師器	
真木野道跡 c地点	包蔵地 集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代	縄文時代 竪穴建物1軒、 土坑4基 古墳時代 竪穴建物3軒 奈良・平安時代 土坑1基	縄文土器 古墳時代 土師器 奈良平安時代 土師器	
北裏畑道跡 f地点	包蔵地	奈良・平安時代 近世	近世 溝跡1条	近世 銭貨、陶磁器	
北裏畑道跡 g地点			なし	なし	

神野遺跡 a地点	包蔵地	縄文時代 弥生時代 奈良・平安時代	なし	縄文土器	
新東原遺跡 m地点	包蔵地	縄文時代 奈良・平安時代	なし	縄文土器、石器	
上谷津台南遺跡 i地点	包蔵地	縄文時代 奈良・平安時代	なし	縄文土器	
変丸宮前上遺跡 d地点	包蔵地	縄文時代 奈良・平安時代	なし	なし	
井戸向遺跡 c地点	包蔵地 集落跡	旧石器時代、縄文時代 弥生時代、古墳時代 奈良・平安時代 中世、近世	なし	奈良・平安時代 土師器	
高津館跡 e地点	城館跡	中世、近世	中世 溝跡1条、土坑3基	なし	
高津館跡 f地点			なし	なし	
高津新田野馬堀遺跡 l地点	野馬堀	近世	近世堀・溝跡3条	近世 陶磁器	
高津梅屋敷遺跡 d地点	包蔵地	縄文時代 奈良・平安時代	なし	縄文土器、石器	
大和田新田芝山遺跡 f地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 奈良・平安時代	なし	なし	
逆水遺跡 h地点	集落跡	縄文時代、弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中世、近世	なし	なし	
池の台遺跡 h地点	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代	なし	なし	
島田込の内遺跡 c地点	包蔵地	旧石器時代、縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代	なし	奈良・平安時代 土師器、須恵器 近世 陶磁器	
要約	1.白幡前遺跡e地点 2.川崎山遺跡t地点 3.内山遺跡j地点 4.殿内遺跡d地点 5.真木野前遺跡a地点 6.真木野遺跡b地点 7.真木野遺跡c地点 8.北真畑遺跡f地点 9.北真畑遺跡g地点 10.神野遺跡a地点 11.新東原遺跡m地点 12.上谷津台南遺跡i地点 13.変丸宮前上遺跡d地点 14.井戸向遺跡c地点 15.高津館跡e地点 16.高津館跡f地点 17.高津新田野馬堀遺跡l地点 18.高津梅屋敷遺跡d地点 19.大和田新田芝山遺跡f地点 20.逆水遺跡h地点 21.池の台遺跡h地点 22.島田込の内遺跡c地点	中近世の上坑や溝を中心に検出。遺物も同時期の陶磁器が多く出土した。また、奈良・平安時代の土坑や土師器もわずかではあるが検出している。 遺構の検出はなかったが、縄文土器（前期・後期）と古墳時代の土師器が出土。遺構は検出されず、ソフトロームから銅片が1点出土した。 古墳時代後期、奈良・平安時代の堅穴建物が各1軒検出、それぞれ同時期の土師器・須恵器が出土。縄文では中期阿玉台式土器もわずかに出土した。 既存宅地で削平されていたため、遺構が検出されない。寛永通宝が出土した。 奈良・平安時代の堅穴建物2軒が検出、同時期の土師器・須恵器が出土した。縄文では中期後半の土器が出土した。 b地点に隣接、縄文中期後半の堅穴建物が検出、古墳時代後期の堅穴建物が3軒検出。縄文土器は、遺構周辺で同時期の土器がまとまって出土し、古墳時代の土師器・須恵器の出土も多い。 遺構は近世以降の溝跡。遺物は寛永通宝のほか、陶磁器と素焼きの土器が出土。遺構・遺物の検出はなかった。 遺構はなく、縄文土器の銅片が1点出土した。 遺構はなく、縄文土器片1点、石器が1点出土した。 遺構はなく、土器片が1点出土した。 近世以降の溝、上坑。遺物も近世以降の素焼きの土器が若干出土した。 遺構はなく、遺物も土師器の銅片がわずかに出土した。 中世の館跡に関する溝跡が検出。その他同時期の土坑も検出。出土遺物はない。遺構・遺物は検出されなかった。 野馬堀に隣接する溝・堀3条。近世以降の陶磁器の銅片多数出土する。 遺構の検出はなかったが、縄文土器の銅片が出土した。 遺構・遺物は検出されなかった。 遺構・遺物は検出されなかった。 近現代の溝以外の遺構・遺物は検出されなかった。 遺構は検出されなかったが、縄文土器では前期、奈良・平安時代の土師器・須恵器の出土がみられた。			

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書 平成 27 年度

平成 28 年 3 月 25 日発行

編集・発行 八千代市教育委員会 教育総務課
千葉県八千代市大和田 138-2
047(483)1151(代表) 047(481)0304(直通)

印刷 金子印刷企画
千葉県八千代市菅山 410-1
